

# 福田寺建造物調査報告書

近江町教育委員会  
長沢御坊 福田寺

## 序文

福田寺は別称布施山息長寺とも云い、中世に現在の長浜市布施町から移され、中世末には湖北十箇寺の一つとして一向宗徒の信仰を集めました。近世になると真宗の別格寺院として寺觀を整えていったようです。

当寺は県近世社寺建築緊急調査の際にも調査対象になりましたが、今回の修理工事にあたり奈良国立文化財研究所のご指導を得て調査を実施しました。

調査によって福田寺の主要建造物の建立年代や技法について検討を加えることができ、ここに報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書が、湖北真宗寺院の基礎資料として、建造物の保護のため活用されることを望みます。  
最後に、ご協力いただいた関係者の方々に、厚くお礼申し上げます。

平成二年三月

近江町教育委員会

教育長 木田 源三郎

## 目 次

第一節 福田寺と福田寺本堂の沿革	一
第二節 福田寺の伽藍	一
一 現在の寺域	一
二 絵図にみる福田寺伽藍と現在の伽藍	一
第三節 福田寺本堂	二
一 平面と構造	二
二 小屋組	三
三 本堂小屋内転用古材による前身本堂の復原	三
四 棟札と工匠	三
第四節 その他の建物	三
第五節 近江町内の近世建築	三
二 九 七 七 七 七 七 七 二 二 一	二 一 一 一 一 一 一 一 一 一

### 例言

一、本書は、昭和六十三・平成元年度の二か年で実施した、福田寺修理工事に伴う建造物調査の報告である。

二、調査は、奈良国立文化財研究所の指導を受け、近江町教育委員会が実施した。

三、調査の体制は次の通りである。

近江町教育委員会

教育長

木田 源三郎

管理課長

須戸 茂樹

社会教育係長

世森 増信

技師

中川通士

奈良国立文化財研究所

所長

鈴木嘉吉

遺構調査室長

上野邦一

主任研究官

松本修自

"

山岸常人

文部技官

島田敏男

四、調査には、近江町文化財専門委員宇野茂樹・古野四郎・柏瀬宏

昭、県教育委員会技術補佐鈴木順治・主査村田信夫、福田寺代表役員大谷照典の各氏から有益な指導、助言を得た。

図表目次

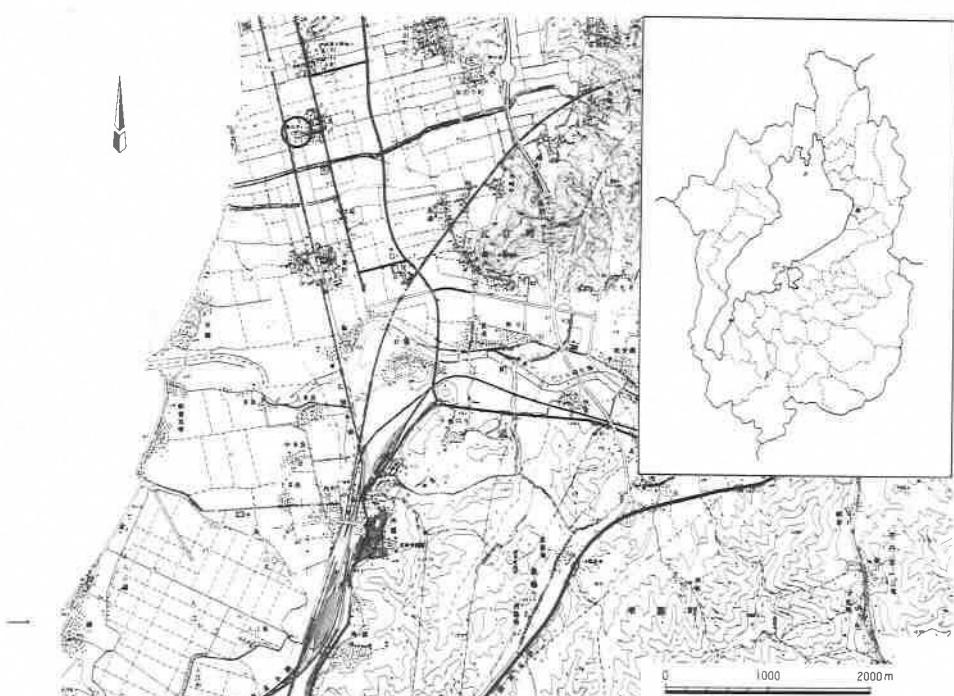
図一	福田寺位置図	一	図一一	本堂梁行断面図	三
図二	伽藍配置見取図	二	図一二	本堂桁行断面図	三
図三	福田寺伽藍現況平面図	三	図一十三	本堂小屋伏図（下層）	四
図四	境内周囲の現況	四	図一十四	本堂小屋伏図（上層）	五
図五	福田寺境内景図	五	図一十五	「わー7」柱長押おさまり	七
図六	福田寺古図（②）	五	図一十六	「るー9」柱長押おさまり	七
図七	福田寺古図（③）	五	図一十七	前身本堂復原平面図	十
図八	福田寺境内景図部分	六	図一十八	「とちー9」柱痕跡図	三
図九	本堂平面図	八	図一十九	「ぬるー9」柱痕跡図	三
図十	本堂全景	九	図二十	「わー8」柱痕跡図	四
図十一	本堂向拝	九	図二十一	「わー7」柱痕跡図	四
図十二	本堂広縁	九	図二十二	「ぬー7」柱痕跡図	四
図十三	本堂外陣虹梁	九	図二十三	「るー9」柱痕跡図	四
図十四	本堂外陣	九	図二十四	「るー13」柱痕跡図	四
図十五	本堂小屋組 東南隅	九	図二十五	「ほー11」柱痕跡図	四
図十六	本堂小屋組 南妻	九	図三十六	「かー9」柱痕跡図	五
図十七	本堂小屋組 西面	九	図三十七	表門梁行断面図	五
図十八	本堂小屋組 上段の梁からの見おろし	一〇	図三十八	表門桁行断面図	五
図十九	本堂小屋組 立ち登らせ柱と梁のおさまり	一〇	図三十九	表門全景	五
図二十	本堂小屋組 上段の梁と小屋束	一〇	図四十	表門詳細	五
			図四十一	表門平面図	三

図四十二	表門内部	三	図六十三	深光寺本堂外観	美
図四十三	表門小屋組	三	図六十四	淨念寺本堂外観	美
図四十四	御殿外観	三	図六十五	淨念寺表門外観	美
図四十五	御殿内部	三	図六十六	長野家住宅外観	毛
図四十六	御殿内部	三	図六十七	長野家住宅平面図	毛
図四十七	御殿内部	三	図六十八	来照寺鐘樓外観	毛
図四十八	御殿小屋組	三	図六十九	證光寺表門外観	毛
図四十九	御殿小屋組	三	図七十	永福寺本堂外観	毛
図五十	御殿・庫裏平面図	三	図七十一	宝福寺本堂外観	毛
図五十一	庫裏外観	三	図七十二	總寧寺本堂平面図	毛
図五十二	庫裏玄関	三	図七十三	總寧寺本堂外観	毛
図五十三	庫裏内部板間・土間	三	図七十四	總寧寺本堂内部	毛
図五十四	庫裏内部仏間	三	図七十五	總寧寺本堂詳細	毛
図五十五	手水舍平面図	三	図七十六	總寧寺總門外観	毛
図五十六	手水舍外観	三	図七十七	淨宗寺本堂平面図	毛
図五十七	手水舍詳細	三	図七十八	淨宗寺本堂外観	毛
図五十八	手水舍臺股	三	図七十九	淨宗寺本堂内部	毛
図五十九	太鼓樓平面図	三			美
図六十	太鼓樓外観	二			美
図六十一	太鼓樓内部	三			美
図六十二	太鼓樓臺股	三			美
表一	転用古材の柱一覧	二			美
表二	A類の柱のうち長押首切りをもつ柱	二			美
表三	C類の柱のうち中敷居もしくは鴨居の痕跡をもつ柱	二			美

## 第一節 福田寺と福田寺本堂の沿革

福田寺は滋賀県坂田郡近江町長沢に所在する。この地は長浜の南にあって、北国街道に面する交通の要衝に当たる。

当寺は白鳳十二年の開基で、息長寺成功徳院と称し、忍海部庄布施村にあつたと伝えるが定かではない。その後天台寺院であつたが、徳治元年（一二〇六）本着坊善顕は、覚如上人に謁し、真宗に帰依し、寺号を福田寺とすることとなつた。延元四年（一三三九）、寺地を現在地に移し、文安年中には六世頓乗が蓮如上人に従い東国を巡錫し、その子宗俊もまた蓮如に従つて、「口伝鈔」や「御伝記」等を賜わつた。延徳二年からは蓮如が住職を勤めた。このようにして福田寺は本願寺と密接な関係を結び、近江でも堅田本福寺などと並ぶ有力な寺院となつた。十六世紀には、宗祖真影をまつる御堂番衆や法会の頭役を勤めているが、そうした本願寺内での地位は、富裕な経済的背景に裏付けられたものであつた。織田信長が近江を攻略した際には、福田寺が中心となって湖北十ヶ寺が盟約を結び、浅井氏に与し、信長と対決した。当時の第十一世覚藝は、四千の門徒を率いて戦つたと言われる。その後、本願寺が東西に分裂すると、十ヶ寺連盟の他の寺と同様東本願寺に従つたが、慶安元年西本願寺に転派した。宝暦十年に、往古よりの御一家内陣の格式を院家に改められた。宝暦年間、本願寺法如の子法覺を第十九世として迎え、連



図一 福田寺位置図

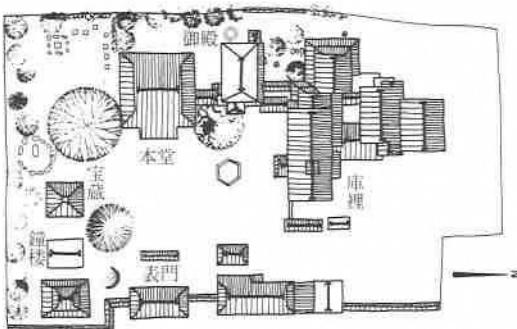
枝地として長沢御坊を称すようになつた。明治十八年には、別格寺と定められ、今に法燈を伝えてゐる。

現在の本堂は、正面登勾欄擬宝珠銘と鬼瓦銘（史料一一二一頁）によつて正徳元年から四年頃にほぼ完成したと考そられ、様式的にみても妥当なものである。「布施山温古記」覚堂の項に、「御堂再造成就現存ノ堂是也」とある。覚堂は宝曆六年に寂してゐるので、上述の事実と齟齬を生じない。今回の調査では本堂の建立に係わる墨書等の史料を見いだしえなかつた。後述のように覚堂の子覚音の代に表門が作られ、第二十一世本成の代の文政二年に台所を再建した。いづれも現存する。なお庫裏背面の庭園は名勝に指定されている。

（註） 本項は以下の書に拠つて記した。

『近江坂田郡誌』第九編 寺院志 大正二年

『湖北有情—福田寺炉辺雜纂—』 森 龍吉 昭和五十年五月  
「布施山温古記」龍谷大学蔵（近江町史編纂事務局所蔵写真版）  
「福田寺縁起」（後掲「福田寺境内景図」所収）



図二 伽藍配置見取図

## 第二節 福田寺の伽藍

### 一、現在の寺域

福田寺の寺地は東向きで、東の北国街道から表門に向かつて参道がのびる。太鼓楼・表門・長屋門・築地塀で境内の東を画する。北・西・南面には築地塀などはないが、各面に沿つて用水路がめぐつて境内を画し、用水路の境内側には石垣が積まれている。

境内北面では幅一・八メートルの水路の境内側に高さ一・三メートルの石垣が積まれ、水路と道路間は幅一メートルあまりの土手となつてゐる。この石垣は間知石積みで、近代に積み直されている。境内西面の北半は、境内北側の水路・石垣がそのまま曲り、西面南半では水路が西へ迂回するが、石垣はまっすぐに伸びて境内西面を区画する。これは、本来石垣と水路の間が大きな堀であつたものを埋め立てたためである。かつては西から流れ込む水路を通つて琵琶湖から舟が出入りし、西面南方の張り出した部分が舟回しあつたという。また、石垣は水路が西へ迂回する付近を境にして、北と南では石の積み方が異なつてゐる。北は近代に積み直された石垣で、南側は自然石を積み上げた古風な形式を残している。

境内南面でも石垣は新しく積み直されており、水路の底と南側にコンクリートが打たれて、かつての風情を失つてゐる。石垣の高さは、西から東にかけて低くなり、東端で約一・〇メートルである。

① 「福田寺境内景図」(図五・八)、② 「福田寺古図」(仮題)、寺域  
福田寺には境内地を描く絵図が四点残されている。四点の図は、

溝幅は一・〇メートル、南側での深さは〇・七メートルで、隣家の敷地に連なる。そしてこの溝は境内東南で北に折れ太鼓楼の前面で再び東に折れる。なお、太鼓楼の土台下にも、境内西面南半でみられたような、自然石積みの古風な石垣が残存している。

## 二、絵図にみる福田寺伽藍と現在の伽藍



図三 福田寺伽藍現況平面図 (図中番号は図四の枝番に対応)

模写したものか、記憶をたよりに復原したものと考えられ、江戸末期の福田寺の伽藍を知り得る貴重な史料である。

「福田寺境内景図」には伽藍内を取り囲む堀と伽藍内の建物が描かれている。まず、図に描かれた寺地の範囲と現在の寺地とをくらべてみよう。図によると、境内の東辺は寺地東北の熊野神社正面の南北の参道に接し、表門の東に門が開く。現在でも熊野神社の南には南北道路が通っており、この道路は図に描かれた参道を踏襲しており、東からの参道が交差する位置に門が建っていたと推定される。

・堀が示され、境内内の建物が記される(図六)、  
③「福田寺古図」(仮題) ②とほぼ同じである  
が、若干表現が異なるもの(図七)、④鉛筆書き  
きで境内の建物の間取りが記されている図であ  
る。①は描かれた年代が記されているが、②・  
③は描かれた年代は不明である。④は鉛筆書き  
であるから、明治以降に描かれたものであろう。  
そのうち①「福田寺境内景図」は、内題に  
「慶應元乙丑年以前 福田寺境内景図」と記さ  
れ、上方に開基以来の縁起が記され、奥書に  
「明治二拾三年五月二十三日 金剛院重信誌  
(角印)」とある。縁起には記されていないが、  
慶應元年に境内の様子が変わったために古図を



図四一五 境内西南 かつては舟廻しであった



図四一1 境内北面の用水路



図四一6 境内東南隅



図四一2 境内北西隅



図四一7 境内南面の用水路



図四一3 境内西面に残る古い石垣

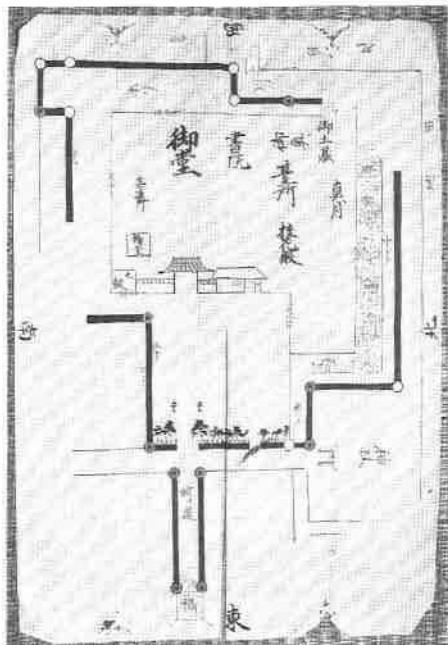


図四一8 太鼓楼下の石垣と用水路

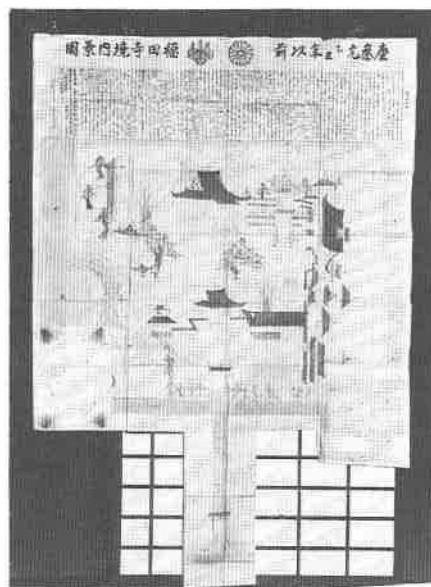


図四一4 境内西面の用水路

図四 境内周囲の現況



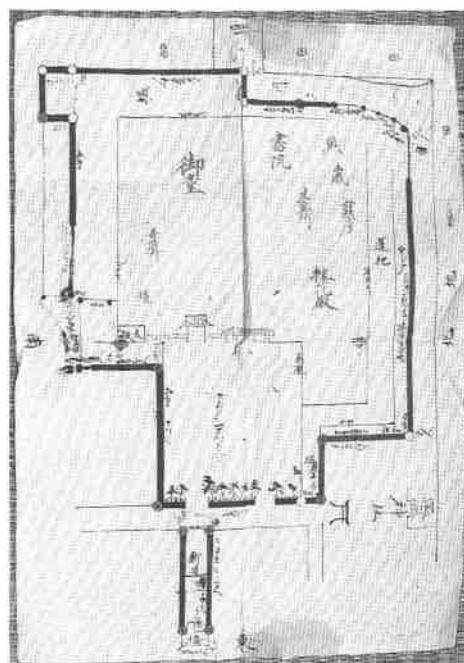
図六 福田寺古図（②）



図五 福田寺境内景図

寺地の東には「蓮池」と記されており、現在の公民館あたりが蓮池であったと伝える。現在の境内北側の水路は図中の寺地の北端にあたると思われる。蓮池の内側には「高塚」とあるが、現在その痕跡は残っていない。また福田寺と熊野神社の間にも「蓮池」が描かれているが、現在はない。

境内の南面は、現状でも経藏の南側で水路が矩折れになつており、図に描かれた寺地の南面の状況を伝えていると考えられる。しかし、図では南側の堀が相当広く描かれており、現在の水路はこの堀の北端を残しているにすぎず、現在、境内南側の民家が立ち並んでいるところが、かつての堀であったと推定される。図に描かれた太鼓楼



図七 福田寺古図（③）

の東から境内の南へ通じる堀は、現在太鼓楼の東を流れる水路に相当する。

伽藍内の建物をみると、現状とはやや異なっている。まず、図には庫裏の東に境内が張り出していくつかの建物が描かれている。即ち熊野神社の西南から長屋門の北を通り、庫裏につながる堀があり、長屋門より東に一ヶ所、長屋門より西で二ヶ所の門が開く。そして、

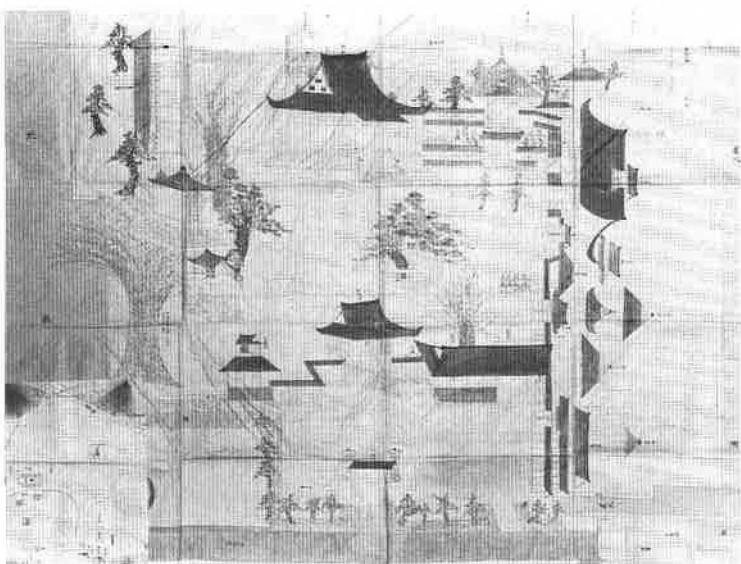
庫裏の東側に入母屋造妻入、檜皮葺の東御殿・玄関・慶華殿・真月殿・東台所・御仮屋・会計局が建ち並んでいた。

庫裏周辺をみると、図では現在の玄関の位置から本堂に向かって廊下と門が描かれている。住職の談によると、昭和十七年頃までは、この廊下が存在したといい、現在も礎石が残存している。現在の庫裏の北側には大規模な住職の住まいが建っているが、図には入母屋造妻入の臨湖亭と呼ばれる建物が描かれている。またその北には、土蔵と宝蔵の一棟の蔵が描かれており、前者は現在の土蔵に該当する。

一方本堂の南側には、経蔵が現位置に描かれているが、現在の経蔵は大正頃に建てられたものと推定されるので、描かれた経蔵は現在の前身建物であろう。構造形式は土蔵造の宝形瓦葺で、現在の経蔵と一致する。経蔵の西には入母屋造瓦葺の蓮如上人御靈屋が描かれる。

以上のように、寺域は周囲の堀が狭められたものの江戸時代末の

姿をほぼ伝えていることが、「福田寺境内景図」によって明らかとなつた。また江戸時代末には、現存する本堂をはじめとする大規模な建物に加え、庫裏の東にも御殿が建ち、現在の伽藍をこえる偉容をほこっていたことが偲ばれる。



図八 福田寺境内景図部分

## 第三節 福田寺本堂

### 一、平面と構造

福田寺本堂は、桁行約二十メートル、梁行約十九メートル、入母屋造、向拝三間、本瓦葺の大規模な真宗本堂である。本堂は東面する。

正面には、広縁・落縁と、縁を二重に巡らして、真宗本堂では最も整った形をとる。内部は大きく外陣と内陣に分かれ。外陣は、間口七間、奥行五間の規模とし、正面から四本目の柱筋を矢来、両側面から二間目を中柱通とする。内陣は外陣より床を一段上げ、中柱通に揃えて間仕切を入れ、内陣と左右の余間に区分する。余間の両脇の広縁の延長部分は室内に取り込んで（南では落縁まで取り込む）各々部屋をつくる。背面には一間幅の細長い後堂を設ける。

柱は、内陣と余間廻りの十六本が円柱の他は、角柱とする。落縁通りは中敷居・鴨居、側通りは、切目長押・内法長押・木鼻付き頭貫・木鼻付き合輪で軸部を固め、広縁通りは柱を横方向の材で固めない。落縁通りと広縁通りの柱は虹梁でつなぐ。組物は、落縁通りは舟肘木、側通りは平三斗と出三斗（いづれも実肘木・拳鼻付き）を交互に置き、広縁通りには組物を用いない。内外陣境の内陣側は出組として、天井桁を受ける。中備は、内外陣境と内陣廻りにのみ臺股を入れる。軒は二軒繁垂木、妻飾は二重虹梁大瓶束とする。内陣と余間の飛貫より上は極彩色を施す。また来迎柱上の組物は出組

を詰組として、その組物群は龍を描いた鏡天井を受ける。

向拝は面取角柱を象鼻付きの虹梁形頭貫で繋ぎ、組物は中は出三斗、両脇は連三斗、中備は彫物とする。

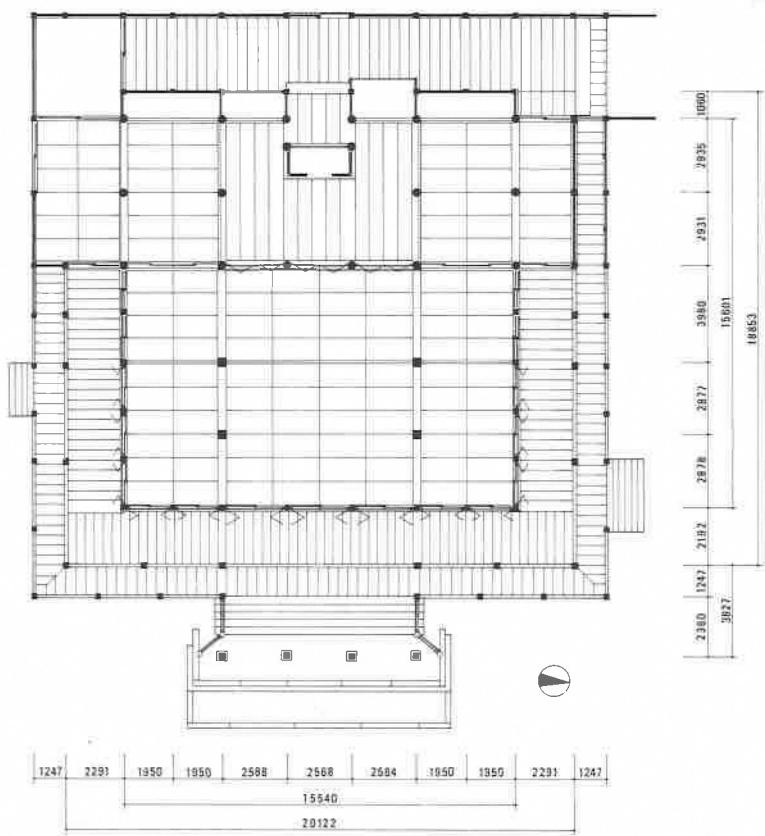
外陣では中柱と側柱、中柱同士、及び中柱と内外陣境を繋いで虹梁をかける。滋賀県では外陣虹梁をこのように縦横に架けるのは福田寺が最も古い。

側廻りの建具に一部改造があり、両側面の前から第四・五間目は、現在板戸と障子が各々引き違いとなっているが、当初は蔀戸と明障子であった。右第五間目の蔀は中古のもので、当初の蔀の吊り金具が内法長押の下に残っている。

この本堂は十八世紀初頭のやや年代の古い真宗本堂であるが、内陣廻りに円柱を用い、内陣須弥壇は当初より後門形式として、進んだ手法を用いている。

この建物の最も見せ場となっている点は向拝である。通常は打越垂木が飛檐垂木と同じ勾配をもつが、ここでは打越垂木を海老虹梁状に湾曲させて、向拝の桁を高くしている。これに伴って、向拝の桁の成を向拝に近づくにつれて高くしている。この手法は、他に彦根市薩摩の善照寺（貞享三年）にのみ見られる特異なものである。

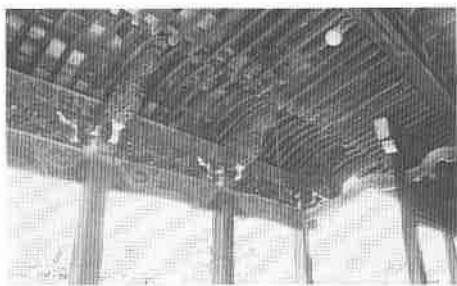
県内でこの建物のように広縁・落縁を備えた大規模な真宗本堂は、重要文化財大通寺（長浜市、明暦三年）を初例として、幕末まで、



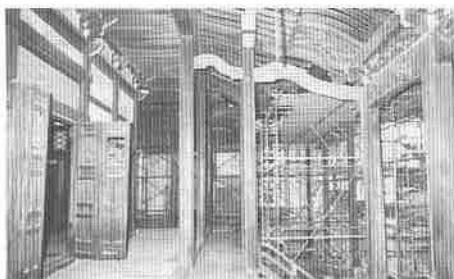
図九 本堂平面図



図十 本堂全景



図十一 本堂向拝



図十二 本堂広縁



図十三 本堂外陣虹梁

十九棟が調査されている。その中で福田寺本堂は建立年代の古い部類に属しながら、古式な技法から脱して、様々な新機軸を打ち出している点で、興味深い遺構と言える。

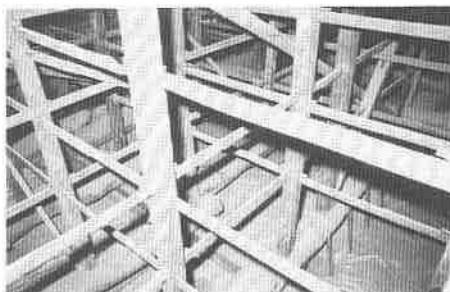
この建物の建立年代は棟札がなく確かにない。屋根に乗る鬼瓦に正徳の銘があるので、その頃には完成したと考えてよい。

## 二、小屋組

近世の寺院建築の構造的な特徴として、立ち登らせ柱の技法がある。これは、柱を組物の下までで止めずに、天井より上まで延ばす技法である。この手法を探ることによって、柱が直接小屋内の野梁



図十四 本堂外陣



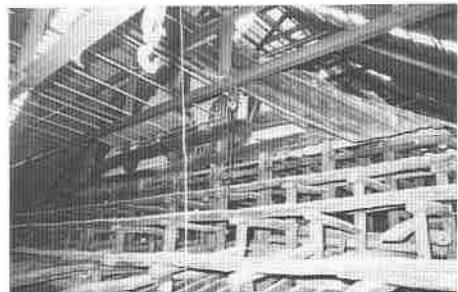
図十八 本堂小屋組 上段の梁からの見おろし



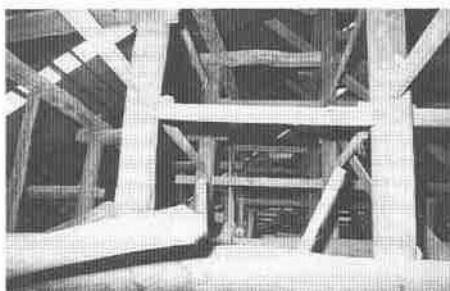
図十五 本堂小屋組 東南隅



図十九 本堂小屋組 立ち登らせ柱と梁のおさまり



図十六 本堂小屋組 南妻



図二十 本堂小屋組 上段の梁と小屋束



図十七 本堂小屋組 西面

と組合わざることとなり、規模の大きい建物を建てるに際して、構造的に強固なものとすることができる。

福田寺本堂の場合、外陣の四本の中柱と須弥壇背面の八本の柱を立ち登らせ柱としている。大通寺本堂では側通りより内側のすべての柱を立ち登らせ柱としており、立ち登らせ柱の少い点で福田寺は保守的である。

小屋組は、梁行断面（図二十一）でみると、二重梁の構造をとつており、柱の頭繋の敷梁を含めると、梁は三重に架けられることになる。下段の梁に束を立てて上段の梁を受け、束には貫を背違いに通して固める。

一段目の梁は、側面側柱通りと中柱通りの計四列に、広縁通りから脇仏壇背面に至る大梁A（二本継ぎ）を架け、その上に桁行に八本の梁B（二本継ぎ）を架け、更にその上に中央に寄せて三本の梁行方向の大梁Cを架けている。二段目の梁は棟通りの中柱間の位置に桁行の梁Dを架け、その上に九本の梁Eを梁行に架ける。三段目は、七本の梁Fを梁行に架けている。一段目の梁Bの内の一本と、第一・三段目の梁E・Fは、中柱筋以外は、柱筋とは揃っていない。立ち登らせ柱の内、外陣の四本は大梁Aを直接受けているが、他の立ち登らせ柱はこれらの大梁とは組合わさっていない。なお内外陣境と内陣背面の柱筋では桁の上に束を立てて梁Bを受けている。梁Cに立つ束の内、母屋桁を受ける束は、各々一本内側の束と繫

梁で繋いでおり、母屋桁はこの繫梁の上に乗ることになる。

第一段目の梁の上に立つ束の束割は、梁行では第二段目の梁を受ける部分で五尺四寸間隔、母屋桁を直接受けける部分で四尺間隔、桁行では梁Dを受ける部分では六尺四寸、それ以外は五尺七寸間隔とする。ただし、第一段目の梁に立つ束の内、中央部分の五本は省略し、その部分の棟通りには筋かい一本をいれている（図二十二）。

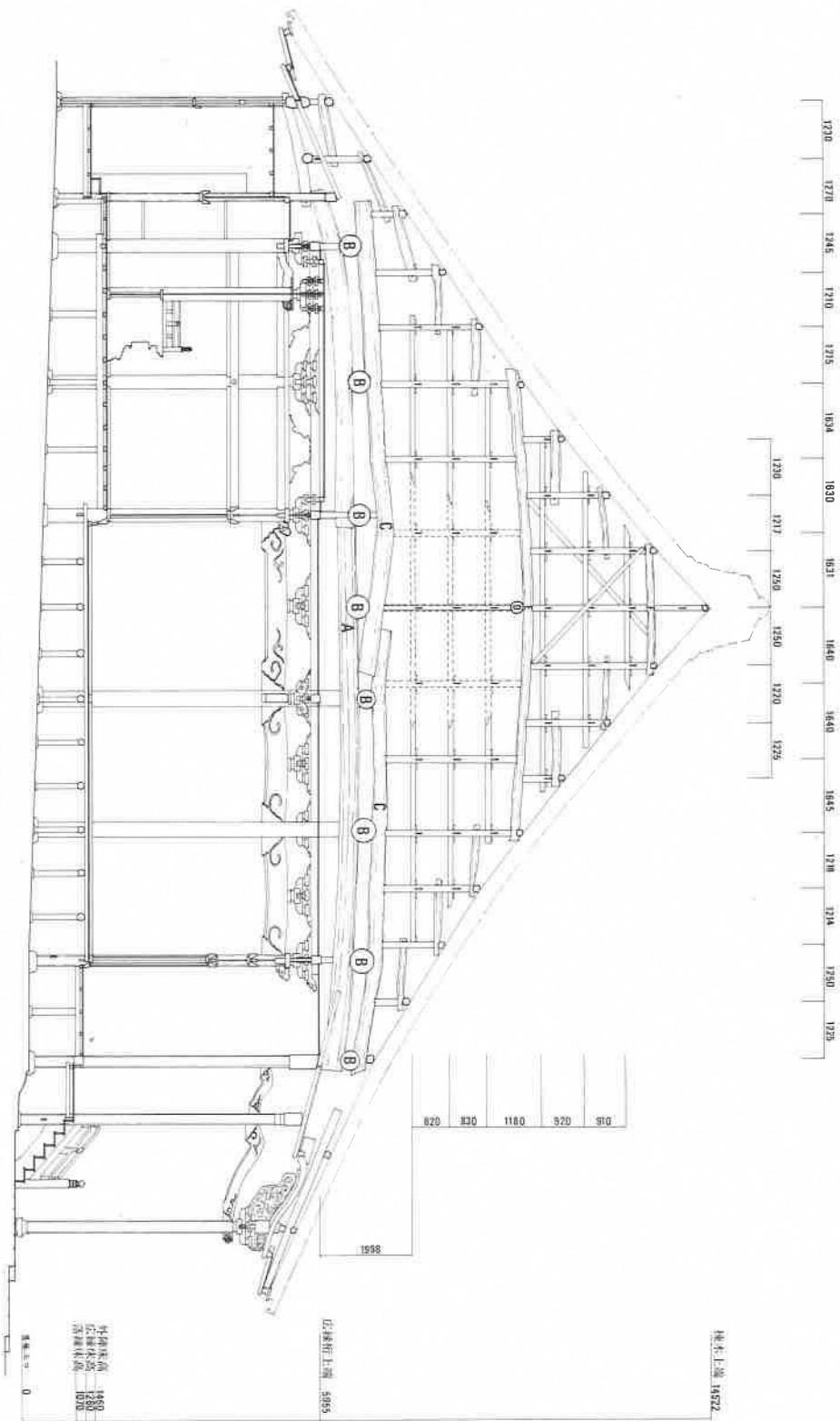
妻飾は、側柱通りより一尺一寸内側に入ったところに立てている。小屋を受ける束のうちの最も妻側の物（図二十三のわ列・ほ列）とは、五寸の間をあけており、この束の外側に妻の壁を置いている。

近世社寺建築緊急調査の際には、小屋組まで調査の手がまわらず、近世の真宗本堂の修理例も多くないので、小屋組の特徴の検討は容易でないが、重要文化財大津別院本堂（大津市 慶安三年）・重要文化財弘誓寺本堂（五個荘町 宝暦十四年）と比較しておきたい。

大津別院の小屋組はきわめて単純で、二重梁構造である。即ち小屋の中には梁行に二重に大梁を架け、束を立て貫で固める。束は半間間隔で立つ。側廻り・内外陣境・中柱すべてを立ち登らせ柱とし、その頂部頭繋で繋いだ上に桁行に大梁を架けて、下段の梁を載せている。

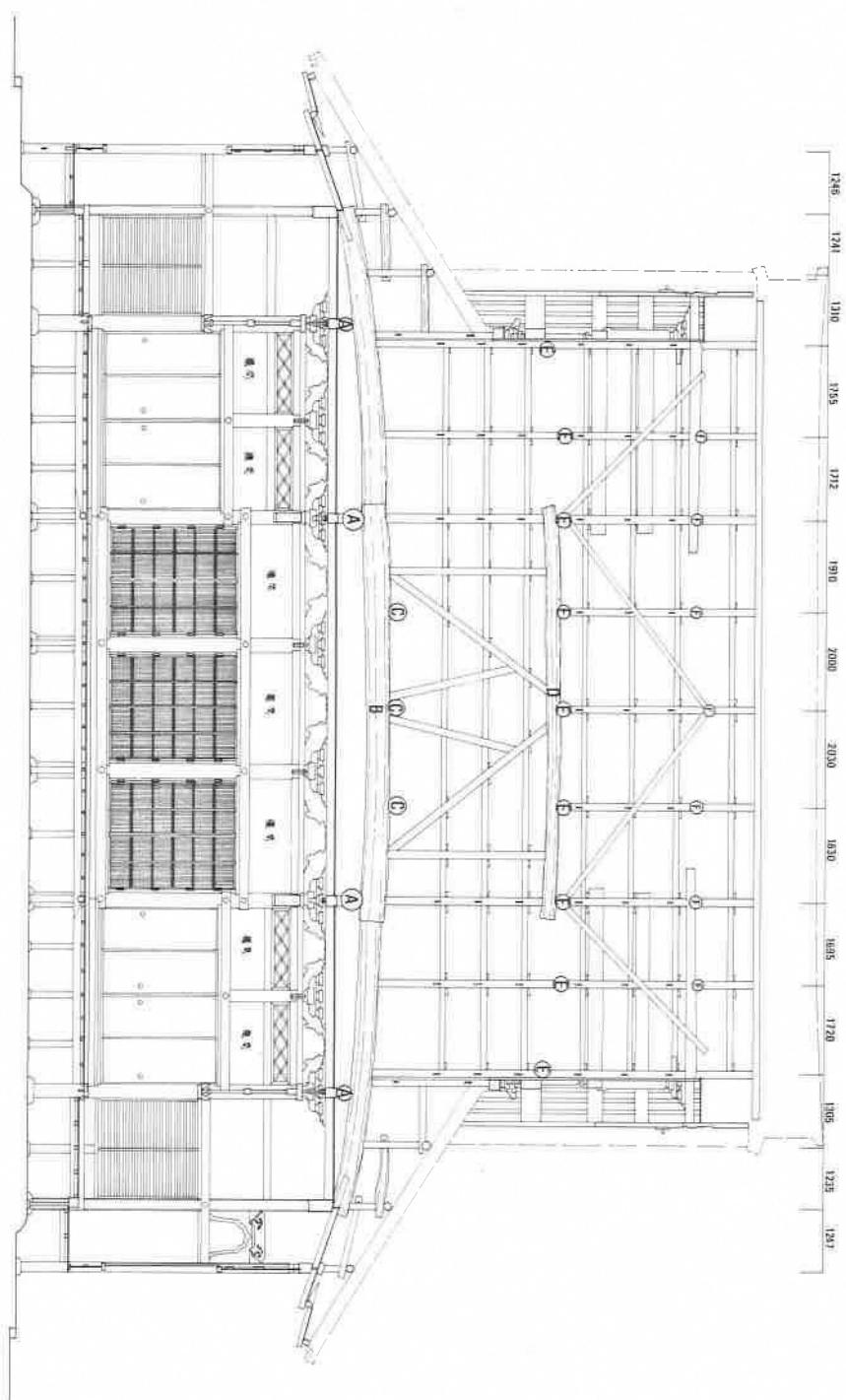
弘誓寺の場合、小屋組は二重梁構造になつておらず、束と背違いに通した貫で小屋を固めている。束は半間毎に立てるが、上段の梁と下段の梁の間に立つ束は一間毎としている。外陣の中柱四本を立ち

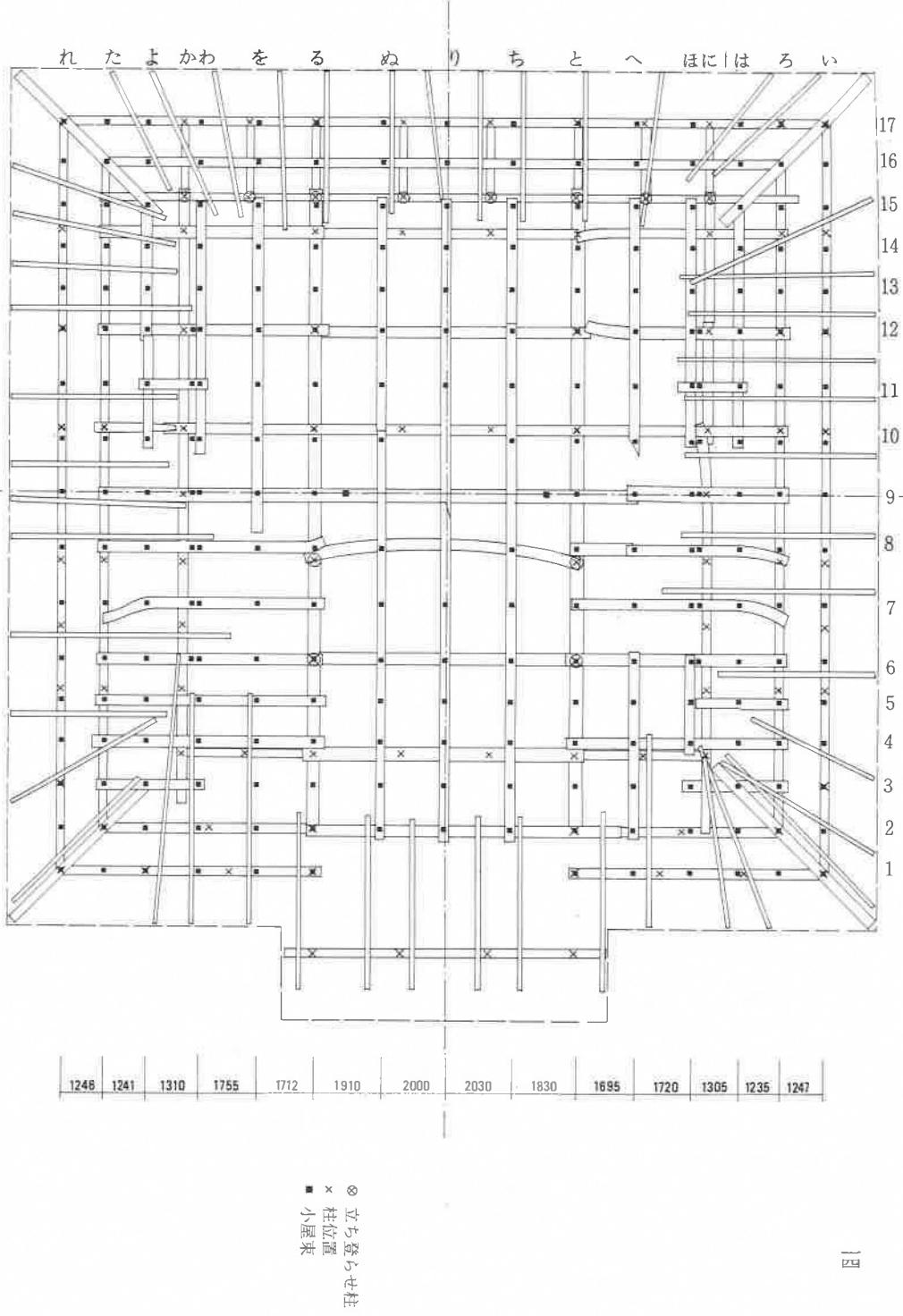
佛像上端 14522



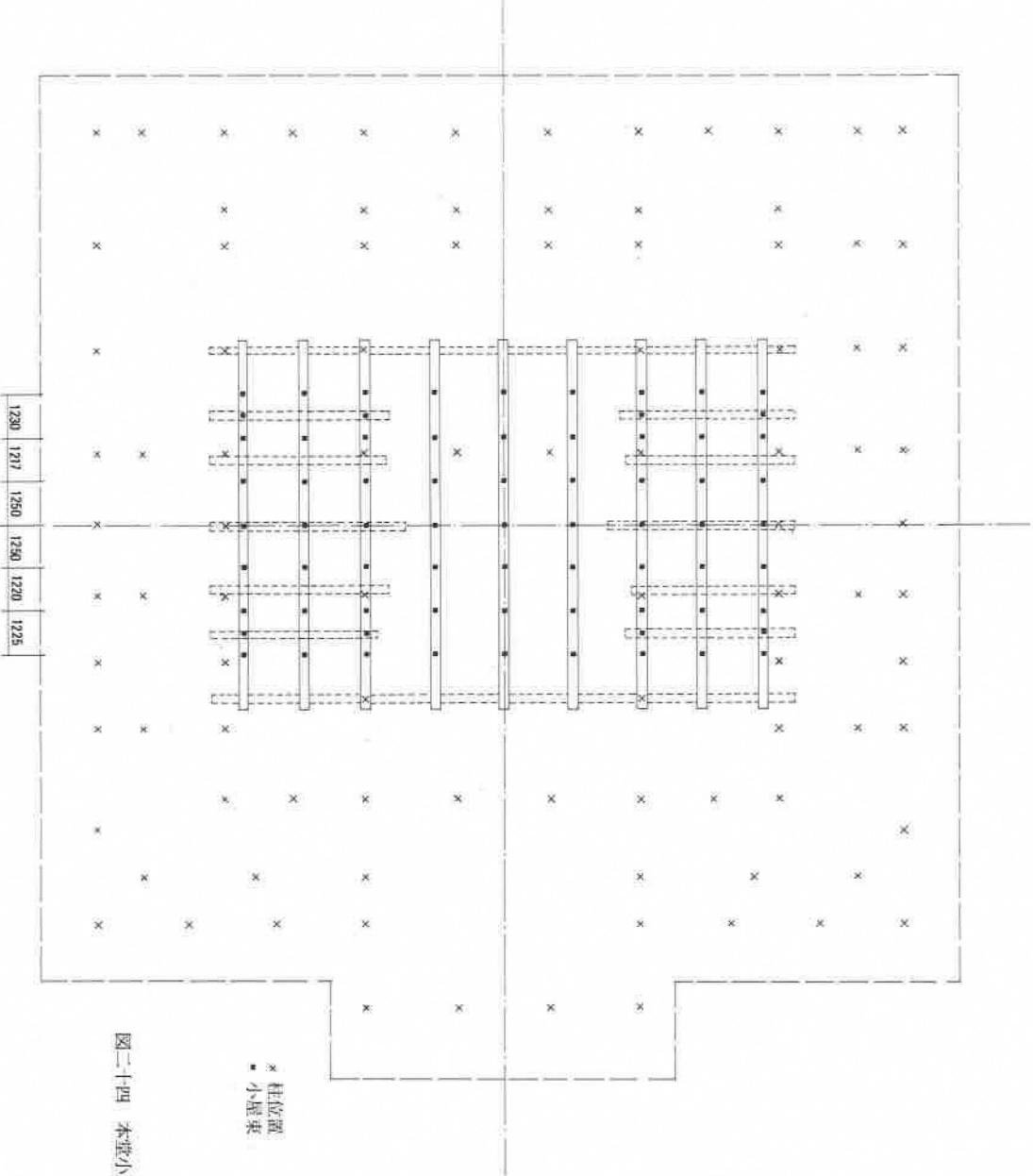
図二十一 本堂梁行断面図

図二十二 本堂桁行断面図





図二十三 本堂小屋伏図（下層）



圖二十四 本堂小屋架圖（上層）

おこなつてみたい。

登らせ柱として、その上に桁行に大梁を架け、その大梁で梁行の下段の梁を受ける構造としている。福田寺に比べるとずっと整備されたものになっている。

以上のように、真宗本堂の小屋組は各々の建物によつて個性がみられる。大津別院では、上段の梁に束とほぼ同断面の材を用いるなど古式なところがみられる。江戸時代中期以降規模が拡大し、大きな屋根を架けるようになって、野物の大材を使った二重梁・三重梁の小屋組が造られるようになるが、福田寺では弘誓寺程整備されはおらず、中央部の束を一部省略するなど、変わった手法も見られる。この束の省略の目的は不明である。

### 三、本堂小屋内転用古材による前身本堂の復原

#### (ア) 転用古材の概要

本堂の小屋、および床下には相当数の古材が転用されていた。古材は、主に小屋内の束、床下の根太に用いられている。小屋束は梁にひかりつけられており、本堂再建後に補入されたものではなく、正徳再建時に用いられたものである。従つて、これら古材は現本堂が建つ以前に建っていた建物、即ち現本堂の前身本堂の部材である可能性が考えられる。もともと寺内の他の建物の部材であつた可能性もあり、これを確認することはできないが、ここでは転用古材が前身本堂の部材であるという前提のもとに、前身本堂の復原作業を

古材の当初の使用部位は、柱・敷居・鴨居・長押で、柱は小屋束に、横架材は床根太に転用されている。調査では転用材と考えられるすべての小屋束について痕跡調査をおこなつた。

古材が転用されていた小屋束は四〇本で、その全てが最下段の梁の上に立つもので、上段の梁に立つ束に転用材はみられなかつた。小屋束に転用された古材はすべて柱材で、柱の形状から以下の三群に分類することができる。

A類 柱太さが一四六ミリから一六〇ミリの面取柱。十六本。

B類 柱太さが一七五ミリメートルとA類に比べてひとまわり太い面取柱。一本。

C類 糸面取柱。柱の太さは一三五ミリから一五一ミリと様々であるが、相対的にA類の柱より細い。二十三本。

#### (イ) 痕跡による柱間装置の復原

A・B・C類の柱ごとに、痕跡から柱間装置を復原すると次のようになる。(なお以下の記述中の方位は現状でのそれを示す。)

A類 この類の柱は、長押の首切り跡があるものと無いものにわけられる。前者は一四本で後者は二本である。

長押首切りのある柱 首切りの位置から、内法長押と蟻壁長押が取り付いたと復原される。内法長押・蟻壁長押とも首切りの幅は一八ミリ前後、深さは一一ミリ前後である。長押のあたりの痕跡から、

内法長押の成は一九ミリ（四寸）に復原できる。蟻壁長押位置には、明確な長押のあたりの痕跡はないが、内法長押と同じくらいと考えてよからう。内法長押と蟻壁長押の首切りの間には、貫・小舞穴があるので、土壁に復原される。

内法長押・敷居の両方の痕跡が残っている柱は七本で、内法寸法は、若干ばらつきがあるが、一九五〇ミリ前後であるから、設計寸法は六尺五寸と推定される。内法長押の首切り下端と蟻壁長押の首切り下端の間隔は一〇一ミリから一〇二五ミリで、設計寸法は三尺四寸と推定される。したがって、敷居上端から蟻壁長押下端までは九尺九寸となる。なお蟻壁長押の首切りをもつ柱は五本であるが、他の一〇本の柱は、内法長押の下端から現存する部分の柱頂端まで、一〇〇〇ミリ以下であるから、蟻壁長押の有無は不明である。ただし、「とー11」柱、「とちー9」（図二十八）柱の内法長押首切り下端から頂端までが、それぞれ一〇三〇ミリ、一七四五ミリで、その間に蟻壁長押の首切りがなく、この二本の柱は蟻壁長押をもたない。

内法長押首切りの下の柱面には、鴨居を留める枘穴・釘穴はみられなかつた。従つて、鴨居は柱には繋結されずに、長押裏から釘留めされたものと考えられる。なお、内法の柱間装置は不明である。

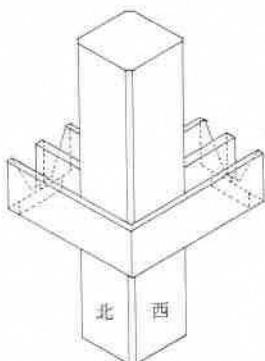
長押は基本的には「わー8」（図三十）のように、相対する二面に打たれる。「わー8」の場合には、北面と南面に長押が打

たれる。このような形式の柱が一〇本ある。

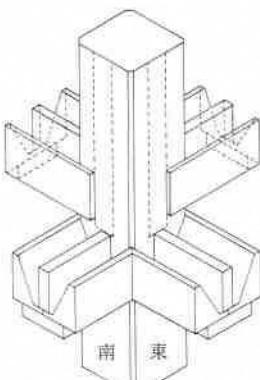
「わー7」（図三十一）は首切りから判断すれば、柱の各面に直角に長押が納まる事になるが、長押に隠れる貫が、西面と北面には貫通しておらず、西面・北面には鴨居等の横架材が取り付いたとは考えにくい。したがつて、長押は図二十五のように納まっていたと推定される。

「ぬー7」（図三十二）・「りー13」では首切りの上方に貫・小舞跡が柱の三方向にみられ、長押は東・南・北面から取り付き、三方に向から長押が取り付いていた。

「るー9」（図三十三）は貫・小舞跡が三方向にあるが、この場合は少し複雑で、内法長押が二段に打たれている。上段と下段の内法長押の高低差は一六一ミリで、あたりの痕跡から復原される長押成（四寸）より大きく、上下の長押は若干隙間をあけて、打たれていくことになる。上下の長押は図二十六のように納まると考えられ、



図二十五 「わー7」柱長押おさまり



図二十六 「るー9」柱長押おさまり

柱の南・東面からとりつく長押は、北・西面から取り付く長押より一段低く、長押上は南・東・西面が土壁、北面が欄間となる。

蟻壁長押が付くのは柱の一面に限られる。例えば「ぬー7」(図三十二)では、西面に長押が打たれる。従って西面側の部屋には内法長押と蟻壁長押の双方が打たれ、東面側の部屋は内法長押のみで蟻壁長押はない。

つぎに、敷居部分をみると、敷居部分が残っている柱は7本で、「わー7」(図三十一)・「わー8」(図三十)の如く、足固め貫が背違いにはいり、長押の打たれる面のひとつには際根太を受ける欠き込みがある。その側面には、床板の厚さ分の間隔をあけて、一段上に敷居の痕跡がある。際根太が打たれる面の反対の面には側面側と同高で敷居の痕跡があるものがある。従って、敷居の一方を板張り、一方を畳敷とすれば、床高に差が生じるが、敷居の両側とも畳敷とすると、床高に差は生じない。

**長押首切りのない柱** 「るー13」(図三十四)と「ほー13」は対応する柱で、「るー13」の東面の敷居の一枚枘と「ほー13」の敷居の二枚枘が対応する。「るー13」には厚鴨居の痕跡があり、内法寸法は一七七五ミリである。なお「ほー13」では、鴨居位置は失われている。敷居・鴨居の取り付く面の一方の横面には寄せを、もう一方の横面には、敷居から一九四ミリ下がった位置に、床板を嵌める欠き込みがある。寄せが取り付く面には、貼り付け壁を挟んで、漆塗

りが部分的に残っており、仏壇の入り隅部と考えられる。寄せから仏壇上面までは五〇七ミリである。

B類 「ぬるー9」(図二十九)は現在は筋かいとして使用されている柱である。西・東面には痕跡がまったくなく、北面と南面には虹梁を入れにした穴があり、その上は小壁となっている。敷居部分は失われているので、内法寸法は不明であるが、虹梁下端から現存部分の下端まで二七六〇ミリである。

C類 柱の痕跡によって三種類の柱にわけられる。まず中敷居・鴨居の痕跡をもつ柱と、それ以外の柱に分類され、鴨居の痕跡をもつ柱は、長押の首切りがある柱とない柱にわけられる。

**中敷居・鴨居のある柱** (長押首切りなし) 中敷居・鴨居の痕跡をもつ柱は八本である。代表的なものが「ほー11」(図三十五)で、下から足固貫・疊よせの枘穴・板決り・中敷居・鴨居の痕跡をもつ。足固貫は幅四八ミリ、成は一二〇ミリ、疊寄せの枘穴は幅一〇ミリ、成は四五ミリである。枘穴周囲の圧痕から、寄せの成は六〇ミリと復原される。板決りは、柱の中央から疊寄せ側に膨られ、中敷居は二本溝で、幅は一一〇ミリ、成は九三ミリである。疊寄せ上端から中敷居上端までは、三〇六ミリ～三三九ミリで、その平均は三二七ミリとなり、設計寸法は一尺九分であったと考えられる。鴨居は幅一〇八ミリで、成は一〇六ミリと厚く、厚鴨居風である。

中敷居・鴨居間の内法は、一七九四ミリから一八一五ミリで、設

計寸法は六尺と考えられる。この柱では床上から鴨居下端までは七尺七分で、内法長押の首切りの下端までの内法寸法が六尺五寸であるから、中敷居・鴨居がつく柱では内法長押は打たれない。

中敷居の痕跡を持つ面の柱間装置は引き違いの窓で、疊寄せが付く面が建物の内側、その対面が建物の外と考えられる。この痕跡をもつ八本の柱のうち七本は相対する二面に中敷居・鴨居の痕跡があり、一本はとなりあう二面に中敷居・鴨居の痕跡がある。

鴨居のある柱（長押首切りあり）「ほー7」は西面に敷居・鴨居、南面に長押の首切りが残っている。鴨居の断面寸法は中敷居とセットとなる鴨居と同じ寸法である。内法寸法は一一一八ミリで、この鴨居は中敷居とセットになる鴨居の高さに揃っているが、中敷居はなく、この柱間は引違戸と復原される。鴨居の一段下には長押の首切りがあり、内法長押は鴨居と直角方向から取り付き、長押の端は西面の左寄りで納めていたと思われる。長押下端までの内法寸法は一九三四ミリでA類の柱の内法寸法にほぼ等しい。

また「かー9」（図三十六）にも鴨居と内法長押の痕跡があり、鴨居と内法長押の高低差が一九〇ミリである。内法寸法は一七二五ミリ以上であるので、中敷居の有無は不明である。したがって「かー9」柱は北面は引き違戸もしくは窓で、西面が内法長押をもつた柱間装置に復原できる。

(イ) 前身建物平面の復原

以上の所見から、前身本堂の平面を復原すると図一十七の如くになる。この復原の根拠となる点を列挙すると次のようになる。

1、真宗本堂の柱としては柱が細く、長い柱間は考え難く、一間毎に柱が立つ平面形式とを考える。

2、柱は面取柱と、糸面取柱に分けられる。内外陣まわりの柱は面取柱、側廻り、背面の柱は糸面取柱と考えられる。

3、特に太い柱（「ぬー9」）には、長押はまわらずに、虹梁が架かっていたと考えられる。

4、長押の有無で柱間を分類すると、長押を打たない柱間、内法長押は打つが蟻壁長押を打たない柱間、内法長押・蟻壁長押とも打つ柱間の三通りとなる。そこで蟻壁長押が打たれるのは、内陣、外陣のどちらであるかが問題となる。「ぬるー9」は外陣中柱と考えられ、虹梁は大入れになつておらず、大入れ穴の大きさ・虹梁の内法高から、虹梁は「ほー10」・「とー5」柱の西面の蟻壁長押上に架かることになる。「ほー10」・「とー5」では、虹梁の架かる面に蟻壁長押が打たれるから、蟻壁長押が打たれる面は外陣となる。

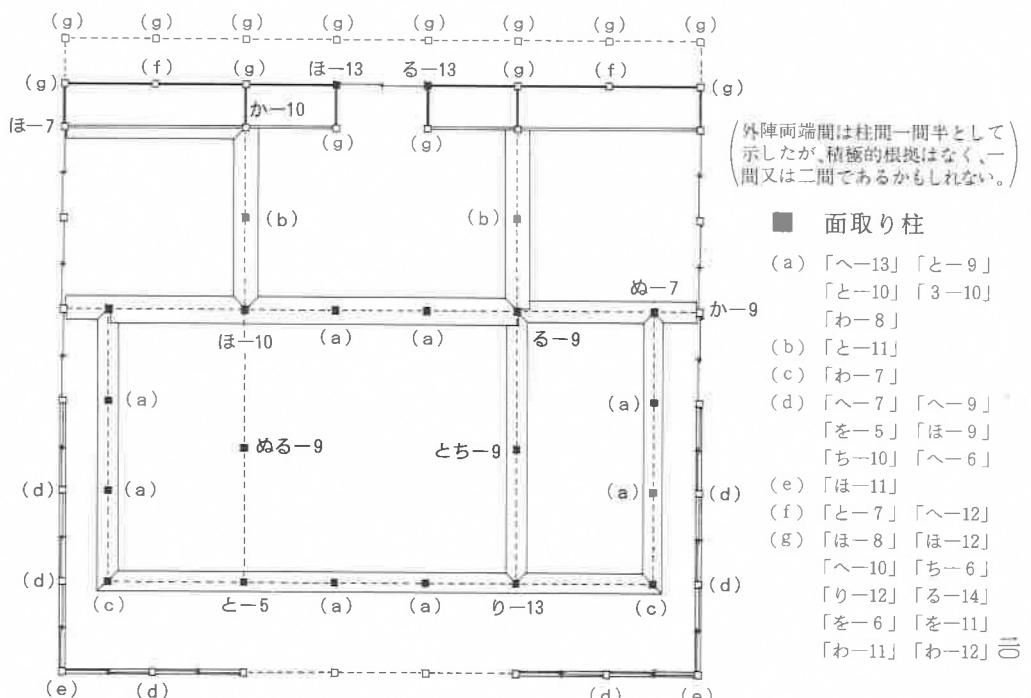
5、内法長押が一段切り上げられている柱「るー9」では、蟻壁長押がつく南面が外陣となるから、西面側は内外陣境の内陣側、東面側は余間側となり、この柱の左右で内法長押高さが異なり内陣側が一段高くなっている。また、外陣側の南面にも貫・長押痕跡があり、長押がまわっているので、この柱筋で外陣を左右に分かつように鴨

居長押が架かっていた。従って、外陣中柱列には長押が打たれ、虹梁の架かるもう一方の中柱列の「ぬるー9」「とー5」の柱筋とは柱間装置が異なる。なお「ほー10」も内外陣境の内陣と余間境にある柱であるがここでは内陣と余間で内法長押高に差はない。従つて余間の床高は左右で差があり外陣中柱列の扱いにも左右の差がある、左右非対称の平面となる（但し以上の事は内法長押の痕跡から言えるものの、床回りの痕跡は明瞭でない。）。

6、内法長押が直角にまわる出隅部分が存在する。「わー7」を使うとすれば、図二十七の外陣隅部分（図中○）が必要となり、外陣まわりに中敷居の窓を考えることはできない。従つて、中敷居の窓は、外陣の外側の縁と建物外部を仕切る柱列と考えられる。

8、仏壇構えと引き違い戸が隣あう位置の柱があり、背面は後門形式（「るー13」「ほー13」）となる。

復原された平面の最も大きな特徴は、平面の構成が非対称なことと、縁まわりを窓で囲うことである。非対称の平面は、櫻井敏雄氏によって復原された玄龍寺本堂の当初平面にみることができる。玄龍寺本堂は福田寺に近い滋賀県東浅井郡浅井町に位置し、建築年代は十七世紀中期と推定されている。復原によると、内外陣境では北余間側の内法長押は外陣内法長押と同高にまわるが、内陣・南余間側は一段切り上げられており、外陣の北側の中柱筋には長押をまわし、その上を小壁とし、南側の中柱筋は飛貫を入れる。これらの点



図二十七 前身本堂復原平面図

柱番号	南北幅(面内)	東西幅(面内)	備考	おもな痕跡
ほ-6	156 (134)	158 (140)	面取	敷居・内法長押
ほ-7	150	153		敷居・内法長押
ほ-8	125	120		
ほ-9	149	150		中敷居・鴨居
ほ-10	160 (145)	155 (137)	面取	内法長押・蟻壁長押・貫(虹梁)
ほ-11	152	152		中敷居・鴨居
ほ-12	140	143		
ほ-13	162 (148)	169 (154)	面取	敷居・よせ
へ-6	135	133		中敷居
へ-7	150	142		中敷居・鴨居
へ-9	142	144		中敷居・鴨居
へ-10	146	150		
へ-12	136	133		
へ-13	148 (128)	157 (137)	面取	内法長押
と-5	155 (140)	155 (135)	面取	内法長押・蟻壁長押・貫(虹梁)
と-7	150	136		
と-9	150 (129)	162 (142)	面取	敷居・内法長押
と-10	152 (130)	156 (135)	面取	敷居・内法長押
と-11	154 (135)	148 (135)	面取	敷居・内法長押
ち-6	133	142		
ち-10	140	130		中敷居・鴨居
り-12	132	138		敷居・薄鴨居
り-13	146 (125)	155 (126)	面取	内法長押
ぬ-7	158 (135)	155 (136)	面取	内法長押・蟻壁長押
る-9	147 (132)	148 (132)	面取	内法長押・蟻壁長押
る-10	160 (140)	152 (130)	面取	敷居・内法長押・蟻壁長押
る-13	160 (142)	166 (152)	面取	敷居・よせ
る-14	145	143		
を-5	148	144		中敷居
を-6	144	141		
を-8	143	142		中敷居・鴨居
を-11	136	136		
わ-7	152 (134)	161 (140)	面取	敷居・内法長押
わ-8	150 (134)	155 (137)	面取	敷居・内法長押
わ-11	146	150		
わ-12	160	156		
か-9	129	140		鴨居・内法長押
か-10	146	148		
とち-9	162 (142)	162 (142)	面取	内法長押
ぬる-9	175 (151)	175 (150)	面取	貫(虹梁)

表一 転用古材の柱一覧(単位mm)

(柱番号は図二十三の番付で示す。)

は福田寺前身本堂と共通する。玄龍寺本堂と福田寺前身本堂は建築年代も近く、他ではみられない平面形式をもっており、真宗本堂の発展過程を考える上で注目されよう。一方、縁側まわりに窓を構える平面形は滋賀県内の現存遺構では他に例はないが、現本堂の東面の縁側柱筋を引き違い窓とし、北側の縁側筋がすり揚げ戸としているのは、前身本堂が窓で囲まれていたことと関わりがあるのであるうか。

このように復原された前身建物の建築年代は、柱の面の大きさないことや内陣背面を後門形式としていることから、中世まで遡るとは考え難く、江戸時代前期と推定される。現本堂が一八世紀の初頭に完成しているので、短命な建物であった。そのために柱等の部材の傷みが少なく、現本堂に転用されることになつたのであろう。

#### 四、棟札と工匠

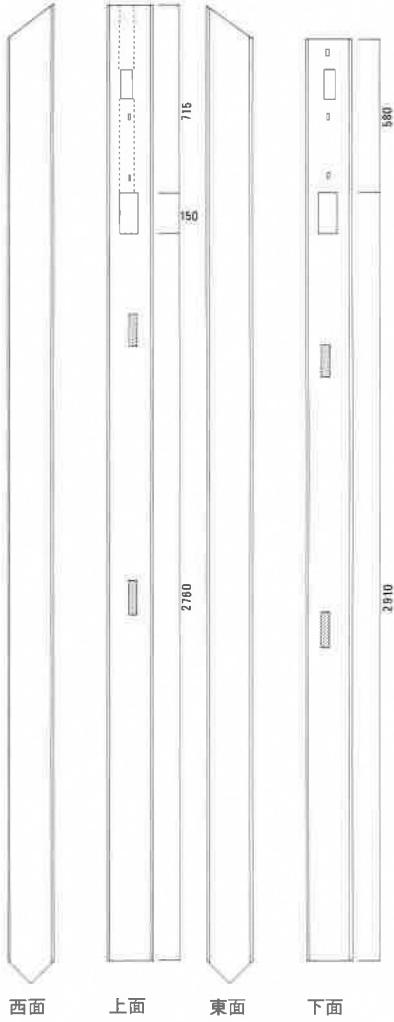
今回の屋根葺き替えに伴う調査においても、

柱番号	現存柱下端 ～敷居枠上	敷居枠上～内法長押首切り下端 ( )内は現存柱下端～内法長押首切り下端	内法長押首切り下端～蟻壁長押首切り下端 ( )内は内法長押下端～現存柱上端	蟻壁長押下端 ～現存柱上端
ほ-6	416	1556	(234)	
ほ-10		(1552)	1025	398
へ-13		(1832)	(356)	
と-5		(1553)	1011	
と-9	421	1955	(579)	
と-10	475	1950	1020	415
と-11	445	1950	(1030)	
り-13		(1582)	(280)	
ぬ-7		(1590)	1088	385
る-9		(1599)	1019	278
る-10	377	2009	1020	390
わ-7	387	1955	(635)	
わ-8	440	1947	(720)	
とち-9		(1945)	(1725)	

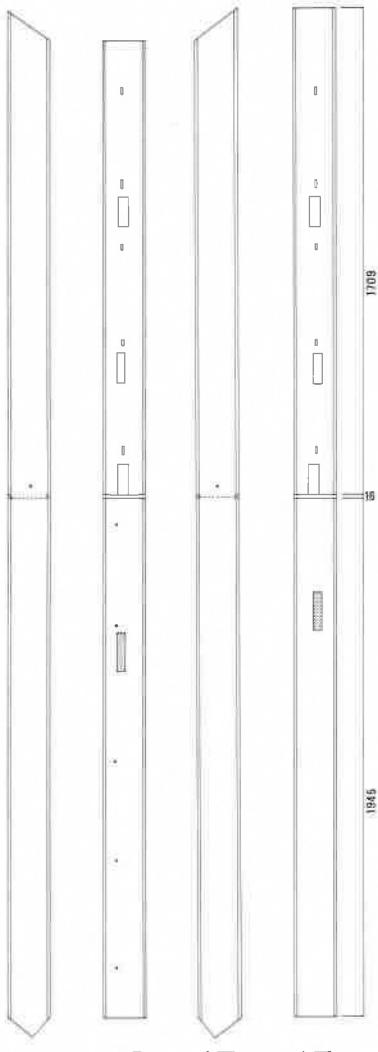
表二 A類の柱のうち長押首切りをもつ柱 (単位mm)

柱番号	現存柱下端 ～よせ枠上端	よせ枠上端 ～中敷居上端	中敷居上端～鴨居下端 ( )内は現柱下端～鴨居下端	鴨居下端 ～現存柱上端	長押首切りが並存する場合 長押首切り下端～鴨居下端
ほ-7			(2118)	345	190
ほ-9	373	361	1791	396	
ほ-11	352	321	1815	346	
へ-6	398	312	1799		
へ-7	713	321	1793	230	
へ-9	520	321	1794	623	
ち-10	700	320	1794	267	
を-5	709	323	(1504)		
を-8	698	339	1795	547	
か-9			(1725)		170

表三 C類の柱のうち中敷居もしくは鴨居の痕跡をもつ柱 (単位mm)

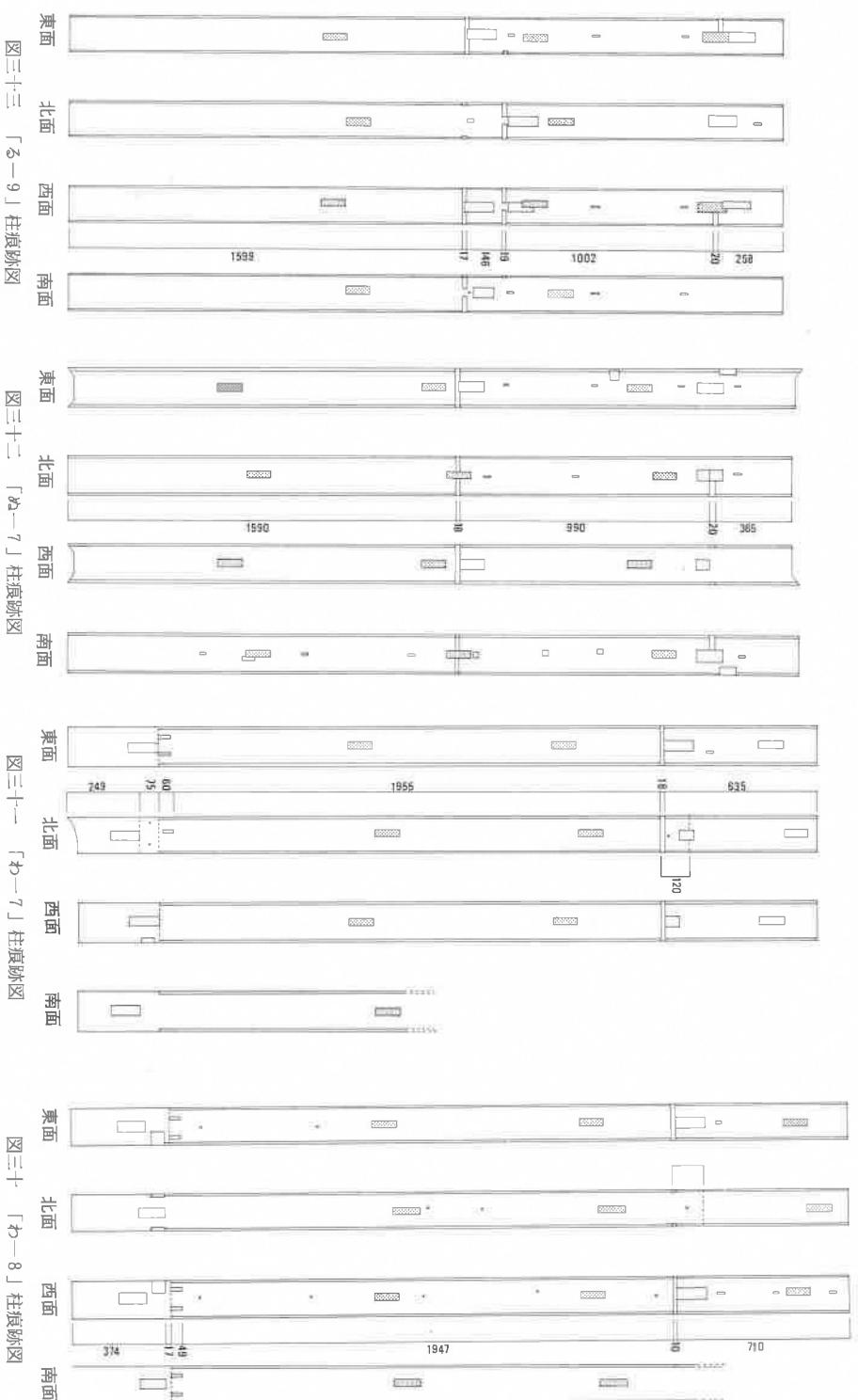


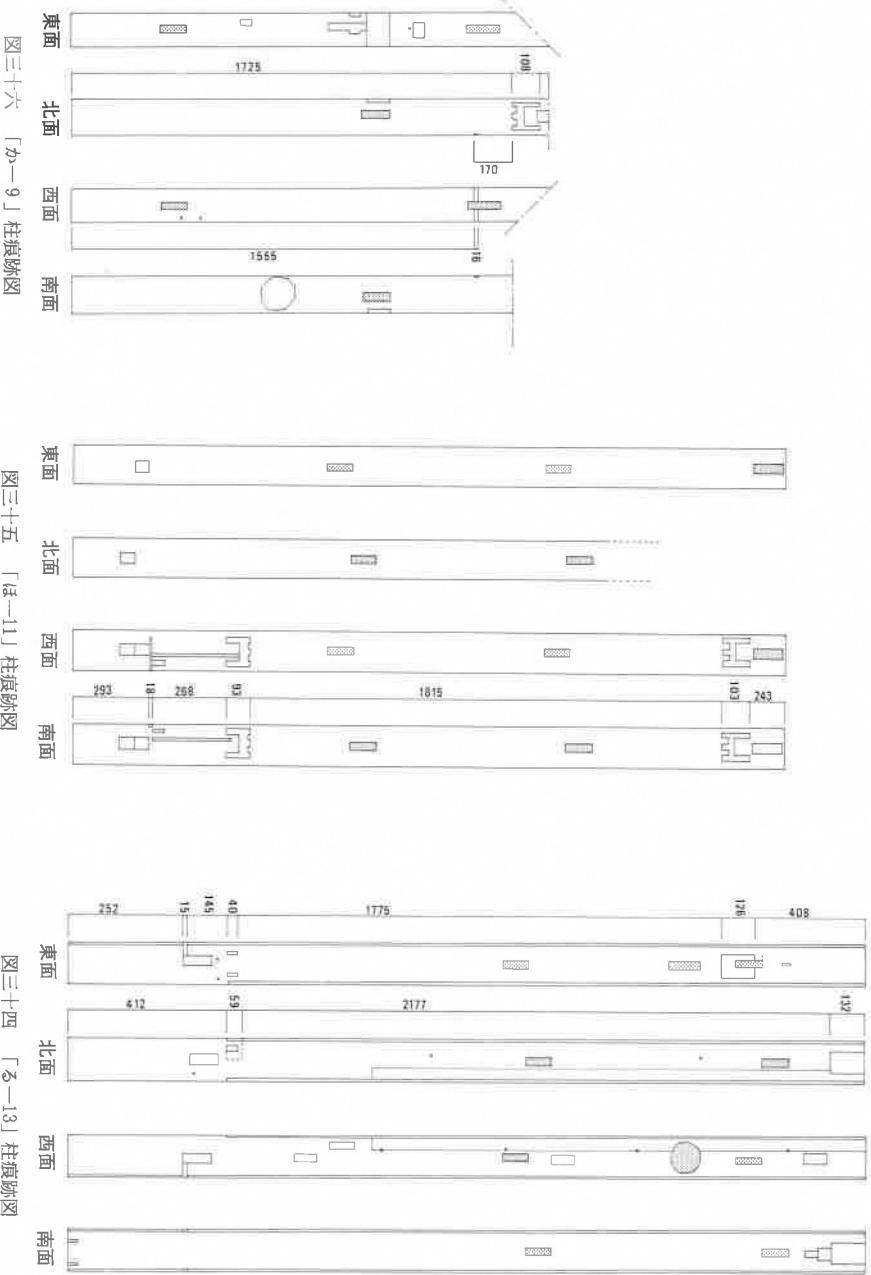
図二十九 「ぬるー9」柱痕跡図



図二十八 「とちー9」柱痕跡図

(以下の柱痕跡図でアミをかけた貫穴は)  
現在の小屋組のための貫穴である。)





棟札・墨書き等の本堂建立に關わる史料は見いだしえなかつた。しかし表門には棟札が残されていたのを今回發見した。表門は規模の大きい四脚門で、屋根は入母屋造本瓦葺である。柱はいずれも円柱で、出組の組物を詰組として、禅宗様の濃い意匠を持つてゐる。頭貫・飛貫に複雑な木鼻を付け、隅の尾垂木を龍の形に彫るなど、各部をにぎやかに飾つてゐるのが、この門の特徴である。

棟札は棟通り中央の束の背面側に三枚合わせて打ち付けられてゐた。そのうち中央のものが当初の棟札であり、外側の二枚は、大正十三年の修理棟札と、そのときに作られた当初の棟札の写しである。当初棟札はおそらく雨漏りのためであらう、表面が風化し文字が薄くなつてゐる。大正の修理時に、銘の滅失をおそれて写しを作成したものと思われる。棟札の銘文は史料二の通りである。これによれば、表門は、福田寺第十八世覺音の代の宝曆十年に、大工羽淵次郎助光貞の手で建立されたことが知られる。本堂とは四十六年の時期差があるが、虹梁絵様等に共通する意匠が見られるので、虞らく本堂も羽淵の手になるものと想定される。

この羽淵姓の大工は、他にもその作例が知られる。いま、羽淵の手になる遺構を掲げると以下のものがある。

春日神社本殿前身　浅井町 寛文八年 大工羽淵次郎助  
享保十三年 棟梁羽淵次良助

伊豆神社拝殿　　湖北町 元禄五年 小工羽淵新助尉

日撫神社本殿　　近江町 享保八年 棟梁羽淵次郎助

・羽淵孫四郎・羽淵林介

軽野神社本殿

秦荘町 享保十年 大工羽淵四郎次家

善樂寺本堂　　伊吹町 延享三年 工匠羽淵次郎助光貞

蓮華寺勅使門　米原町 文化十四年 大工羽淵次郎助

日撫神社　　秦荘町 享保十年 大工羽淵次郎助光貞

同忤河内

(いづれも棟札もしくはその写しによる。)

日撫神社・善樂寺の棟札によつて、羽淵は坂田郡法勝寺郷顔戸村神郷に住み、代々大工を営む家柄であったことが知られる。顔戸村の北の常喜村・加田村等、近江町と長浜市の境付近は近世以来大工の集住した所として知られ、常喜村では宮部姓の大工が近代まで名をなしてゐる。羽淵は当地方でも由緒ある日撫神社の造営を手掛けており、坂田郡では有力な大工であつたらしい。その作風の特徴は、細部に雲や龍などの具象的な彫刻を多用し、木鼻や虹梁絵様も複雑な形をとり、絵様渦先端部を尖頭円形とすることが挙げられる。福田寺表門もこの特徴が顯著に現れてゐる。本堂では細部にこれと共通する特徴がみられるほか、向拝部分に独特の意匠を用いる点も羽淵の力量に求めることができるかも知れない。なお、鐘楼は様式的に本堂よりやや遡る時期の遺構であるが、意匠は共通する面があり、本堂・鐘楼の大工の判明する史料が出現すれば、羽淵一統の作風の変遷を考える上でも貴重な資料を提供するはずである。

史料

福田寺本堂勾欄擬宝珠銘及瓦銘

(勾欄擬寶珠銘)

正徳元年  
願主長沢惣中  
二州兩役田郡

七月  
癸卯

(南東隅鬼瓦側面)

正德四年六月吉日 細工人

正德四年六月吉日  
綱工人京大佛住  
山口太兵衛

(北西降棟鬼瓦側面)

者いやかん兵衛

(南西隅二ノ鬼側面)

(南西隅鬼瓦側面)

(鬼瓦)

寛政四月吉日

(向拝 南隅)

正徳元年卯七月日

うん居所

ふ谷瓦大工西嶋所平

(平瓦)	（丸瓦）	（丸瓦）	（丸瓦）	（瓦銘）	（獅子口 南）	（獅子口 北）
松原 濱崎惣次郎	ふたるふや 作人平兵衛	かわらしおたる 作人平兵衛	山城大仏住瓦師源七作	江州長濱 藤原勝泉	松原村 世繼村 福井庄右工門	松原村 亥四月吉日 瓦屋重三良 作之
（瓦師）	（瓦師）	（瓦師）	（瓦師）	（瓦師）	（瓦師）	（瓦師）
同藤原勝高	同瓦師	同瓦師	同瓦師	下船町	下船町	阪田富二郎 寄進
同瓦師	同瓦師	同瓦師	同瓦師	山村	山村	正徳元年 七月日 安ん 座敷 小谷瓦師 西嶋所平
同瓦師	同瓦師	同瓦師	同瓦師	紺屋町	紺屋町	（向拝 北隅） 京 柴田新兵衛 作之
同瓦師	同瓦師	同瓦師	同瓦師	なこや 利	なこや 利	明治廿年 亥四月吉日 瓦屋重三良 作之
日八	よつ	よつ	よつ	なこや 利	なこや 利	（平瓦）

史料二 福田寺表門棟札

三六

史料四

寶曆十年庚辰歲 布施山功德院福田寺十八世覺音(花押)

天下和順日月清明風雨以時災厲不起

表

奉建立層門

惣門徒中

國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓

大工

八月二十八日

羽淵次郎助光貞

(大棟西獅子口)

文久三亥  
三月中旬

(大棟北獅子口)

江州彦根  
松原湊

手洗舍瓦銘  
(大棟東獅子口)

宝曆十三年  
下坂中村瓦口伊兵衛

末十月吉日  
瓦師喜助

御瓦師  
善九郎  
作人

裏

發起 功德院權律師 覺堂  
次第 傳法院 覺榮

(寸法)  
774  
738  
220  
220  
23  
(mm)  
檜板曰

頂部は斜に切る  
宝曆十三年  
欠損

瓦師喜助

史料三

表門瓦銘

(大棟北獅子口)

(大棟南獅子口)  
明和六年己丑八月吉祥日

同紺屋町長兵衛作之  
藤原勝宗

史料五

太鼓樓瓦銘  
(大棟南獅子口)

(北妻降棟獅子口)

明和六年戊午八月上旬  
長濱下船町瓦屋勘兵衛

前河善九郎

御瓦師

文久三亥  
三月中旬

史料四

明和六年戊午八月吉祥日

獅子口細工人

淵元太郎右衛門

良近

拾武枚之内

江州 松原

瓦師喜助

長濱瓦屋

藤原弥兵衛

良近

(北妻降棟獅子口)

明和六年戊午八月上旬  
長濱下船町瓦屋勘兵衛

前河善九郎

御瓦師

文久三亥  
三月中旬

淵元太郎右衛門

作者水野善助

造之

(南妻降棟(西側)獅子口)

明和六年戊午八月上旬  
同紺屋町長兵衛作之

藤原勝宗

文久三亥  
三月中旬

作者

藤原弥兵衛

水野善助

造之

(南妻降棟(西側)獅子口)

明和六年戊午八月上旬  
長濱下船町瓦屋勘兵衛

藤原勝宗

文久三亥  
三月中旬

作者

藤原弥兵衛

水野善助

造之

(南妻降棟(西側)獅子口)

明和六年戊午八月上旬  
長濱下船町瓦屋勘兵衛

藤原勝宗

文久三亥  
三月中旬

明和六年戊午八月上旬  
長濱下船町瓦屋勘兵衛

拾武枚之内

## 第四節 その他の建物

### 一、表門

四脚門 入母屋造 本瓦葺

本堂の正面にたつ豪快な四脚門である。柱はすべて円柱である。

組物は拳鼻付の出組とし、内側は一手目に実肘木をおいて天井桁

を受け、軒裏には蛇腹支輪を備える。隅組物には尾垂木がつき、尾

垂木を龍の形に彫る。正・背面の中備は詰組、側面の中備は幕股と

し、幕股は下から見上げたときに足元が見えるように、足元にかい

ものをおいて持ち上げている。側面の腰長押と飛貫の間には花狭間

をはめ、飛貫と頭貫の間には幕股をおき、飛貫の梁間方向と頭貫の

桁行・梁間両方向に木鼻を出して、にぎやかなつくりとなつてい

る。

小屋組は、まず桁行方向・梁行方向に梁を交互に一段づつ重ね、その上に架けた梁行方向の梁が茅負手前まで延びて跳木の役目を兼ね、桁行方向に二筋におかれたS字形の跳木をおさえる。そして、

その梁上に束を立てて母屋桁を受け、親柱筋には梁を一段置いて棟束を立てている。また、最下段の桁行方向の梁上に束を一本立てて、化粧隅木を枘差しにし、束上に野隅木をおく。小屋内は、以上の他にも多数の跳木が入っており、複雑な小屋組となつていて。

建築年代は、棟札に記された宝歷十年（一七六〇）の上棟と認め

てよい。獅子口には明和六年（一七六九）の銘があり、上棟の年代とは九年のずれがある。上棟から瓦が完全に葺き終わるまでに九年間を要したことになる。

### 二、御殿（県指定有形文化財）

桁行五三・八メートル 梁間三九・九メートル 入母屋造

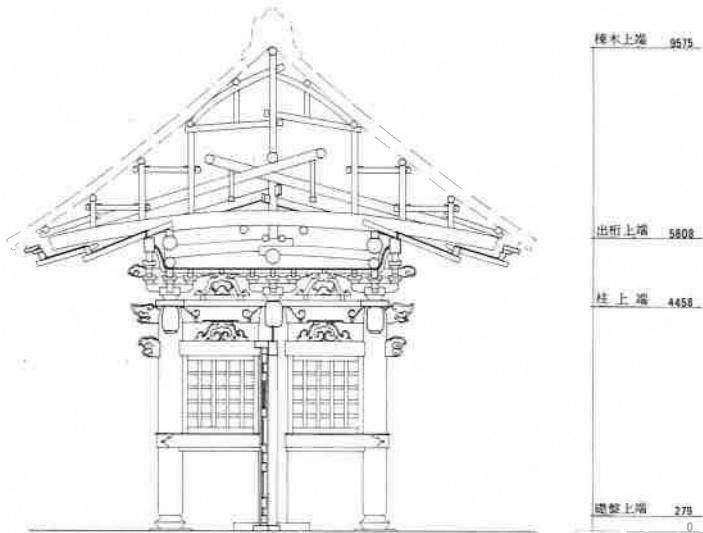
茅葺

玄関 正面一間側面一間 入母屋造 妻入 棱瓦葺

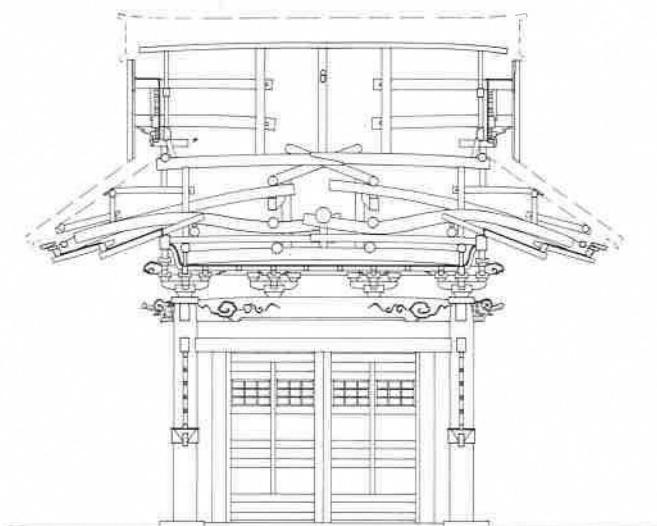
本堂の北にひっそりと建つ瀟洒な茅葺の建物である。東南には入母屋造妻入瓦葺の玄関が取り付く。御殿内部は二列八室に部屋を設け、各部屋とも長押をまわし、天井は竿縁天井としている。南側と西側にはそれぞれ幅一間・半間の内縁（鞘の間）がまわり、北側は幅半間の廊下として窓を構える。北側筋の柱は中古材で、後世の改造があることが知られる。西端の二室は床が一段上がり、上段の間とし、南側の八疊の間を玉座と称し、花頭窓の付書院を構える。東北の二つの八疊の間にはそれぞれ床が構えられており、法主の私的な部屋で「衣裳の間」と呼ぶ。

小屋組は又首組とし、梁行方向の梁上に桁行方向の梁をならべ、束を立てて又首台をおき、又首台上には竹すのこを張る。軒は、腕木を出して出桁を受け、軒小天井をはり、軒裏に垂木は見せない。

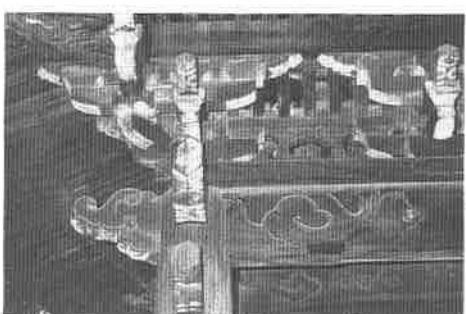
寺伝によると「浅井御殿」と称し、小谷城から移築したと伝えるが、現御殿の建立年代が中世末まで遡るとは考えがたく、寺伝は現



図三十七 表門梁行断面図



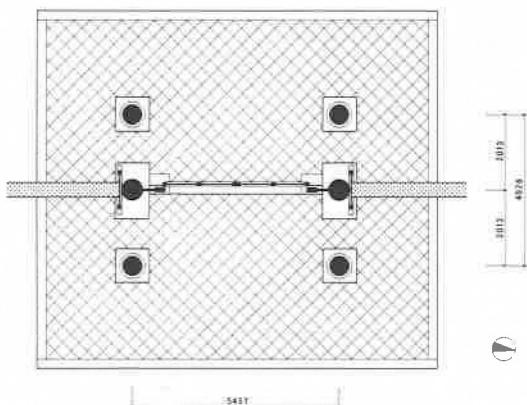
図三十八 表門桁行断面図



図四十 表門詳細



図三十九 表門全景



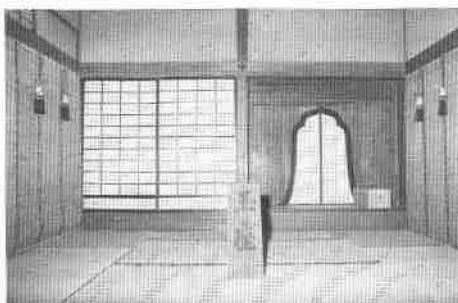
図四十一 表門平面図



図四十五 御殿内部



図四十二 表門内部



図四十六 御殿内部



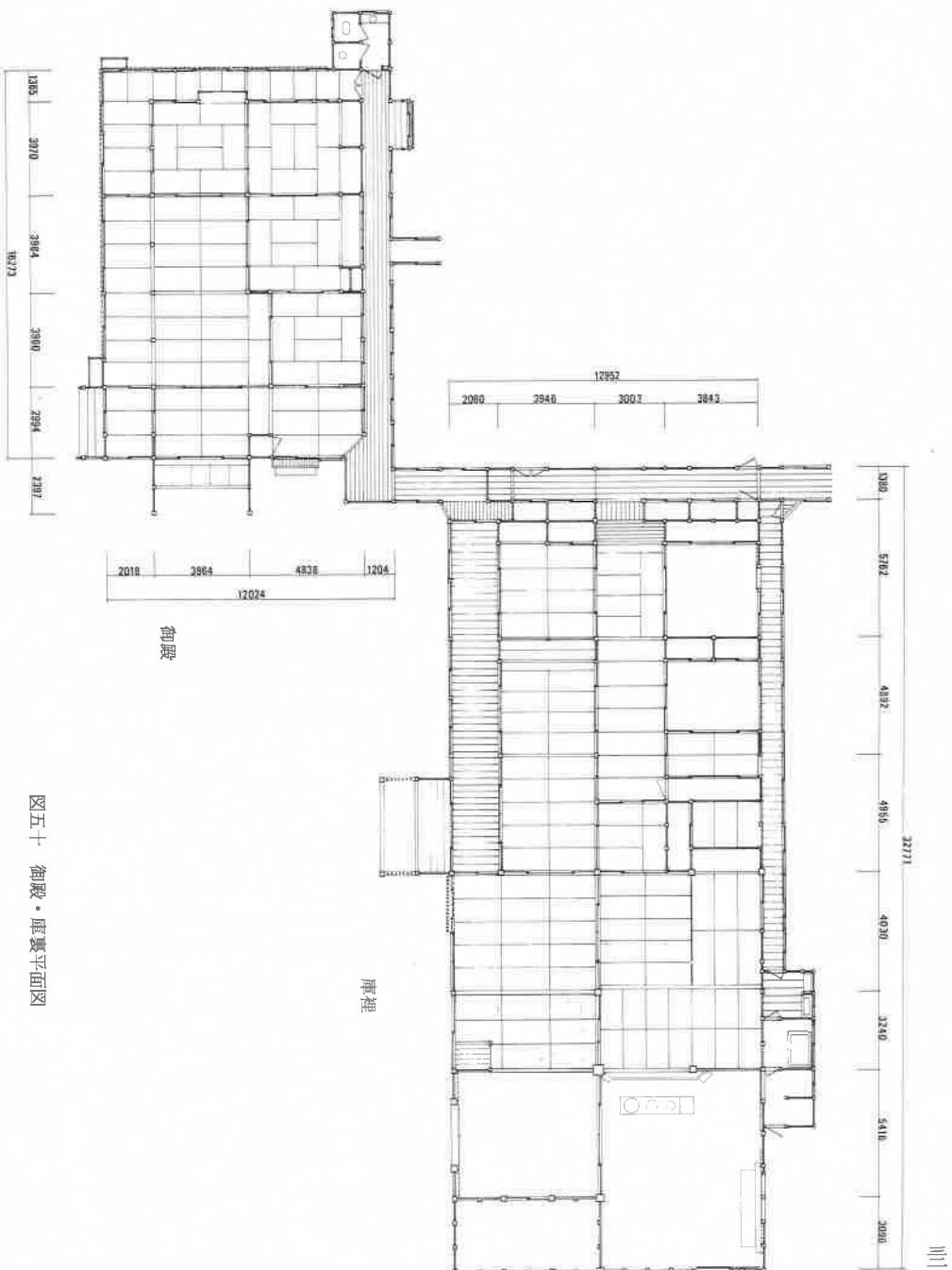
図四十三 表門小屋組



図四十七 御殿内部



図四十四 御殿外観



図五十 御殿・庫裏平面図

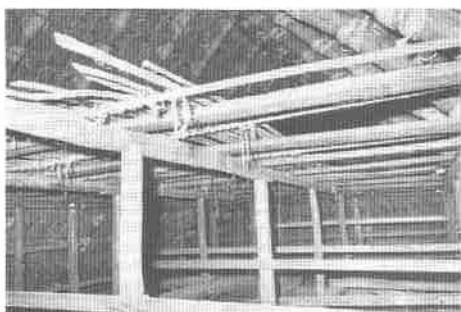
御殿の前身建物に関するものであろうか。現御殿の建立年代については、史料に欠けるものの、本堂再建に先行する十七世紀後半頃と考えられる。

### 三、庫裏

桁行三一・七メートル 梁間一二・九メートル 切妻造  
玄関 正面一間側面二間 入母屋造妻入 桟瓦葺

本堂の東北に南面する大規模な建物である。屋根は切妻造、桟瓦葺とし、棟に煙出しをおく。

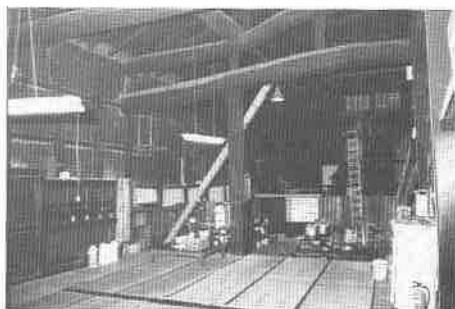
内部は東から土間、板間、居室部にわかれ、居室部東南に玄関が取り付く。土間・板間は天井を張らずに、小屋組をみせる。土間は



図四十八 御殿小屋組



図四十九 御殿小屋組



図五十三 庫裏内部板間・土間



図五十一 庫裏外観



図五十四 庫裏内部仏間



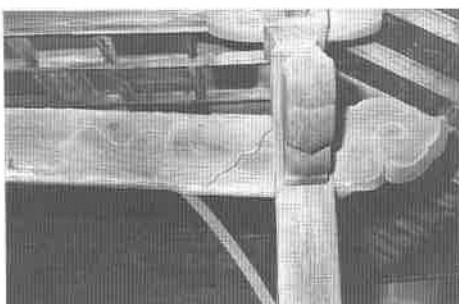
図五十二 庫裏玄関

間口八・五メートルで、下手に納屋をつくる。納屋は一時居室に改造されているが、当初も納屋であった。土間中央を棟通りで仕切る格子戸は中古に付加されたもので、当初は土間に間仕切はなかった。板間は下手一間半を板敷とし、框をはさみ上手一間半を畳敷とし、差し鴨居によって南北二室に分かつ。土間・板間まわりの側柱の太さはおよそ一〇〇ミリメートル角で、居室まわりの柱（一五〇ミリメートル角）よりひとまわり太い。また、土間・板間内部の柱はさらに太く（三〇〇ミリメートル）、とくに土間・板間境の中央の柱は四一〇ミリメートル（面内三一五ミリメートル）にもなる。

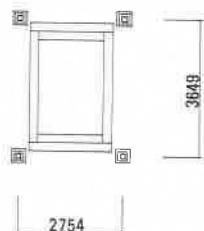
居室部は南を一間幅の板敷の入側とし、北側に東西に三列十室をおく。入側と下手の七室は天井を根太天井とし、上手の三室は棹縁天井とし、長押をまわしている。その下手前面は仏間とし、二間幅の仏壇を構える。

玄関は昭和十七年以降に付加されたもので、当初は本堂との間を廊下で繋いでいた。なお、現在の玄関は桟瓦葺であるが、玄関が付加された当初は柿葺であった。

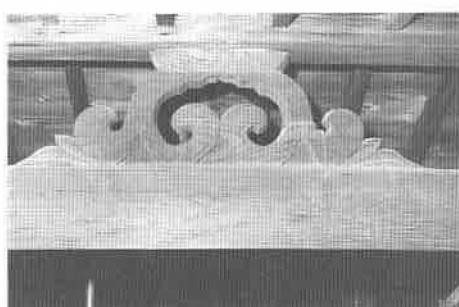
小屋組は、梁を二段に組む構造である。棟通りは、建物の中央を東西に通る柱筋とは揃わず、若干北に寄る。側柱筋より外側には化粧垂木をおき、内部では野小屋をみせる。化粧垂木は側柱筋の内側には延びないが、三本ごとに側柱筋から一間内側の母屋筋まで延ば



図五十七 手水舎詳細



図五十五 手水舎平面図



図五十八 手水舎墓股



図五十六 手水舎外観

して力垂木とし、跳木を五支ごとにいれている。垂木は直材で、けらば垂木だけは、軒反りに沿って反りをもつ。

寺伝によると文政年間の建築と伝え、戸口上に架かる虹梁の絵様は時代相応である。居室部に若干の改造はみられるが、当初の姿をよくとどめており、江戸時代後期の大規模庫裏建築として貴重な遺構である。

#### 四、手水舎

桁行一間 梁間一間 入母屋造 棟瓦葺

長屋門の西に位置する入母屋造の建物である。柱は上方に粽をもつた角柱とし、柱を頭貫でつなぐ。組物は大斗肘木とし、中備に幕股を置く。内部は格天井をはる。

獅子口に宝曆十三年の銘があるが、虹梁絵様は十八世紀には遡り得ず幕末に建て替えられたものと思われる。

#### 五、太鼓楼

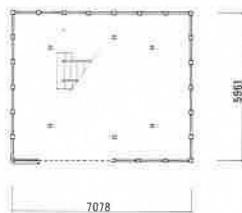
桁行七・八メートル 梁間六・〇メートル 重層 入母屋

造 棟瓦葺

境内の東南隅に位置する重層入母屋造の建物で、上層には大きな太鼓を釣り下げている。下層は南北二室にわかれ、北側を土間、南側を床張り疊敷とする。柱間装置は西面土間側を一本引きの板戸とするほかは、すべて土壁でふさぐ。上層は、下層桁上に井桁に組んだ梁の交点に柱を立て、舟肘木で桁を受け、平側の中備に幕股をお



図六十一 太鼓樓内部



図五十九 太鼓樓平面図



図六十 太鼓樓外観



図六十二 太鼓樓幕股

く。

柱間装置は妻側に花頭窓をおき、平側は格子窓の内側に引き違  
い板戸とする。上層の幕股は手洗舎の幕股に似ている。

屋根瓦に文久三年の銘があるのでその頃に作られたと考えてよい。

伽藍整備の最終段階の建立である。

## 六、経蔵

正面五・九メートル 側面五・九メートル 土藏造 宝形  
本瓦葺

鐘楼の西に位置する白漆喰塗りの建物である。桁は柱上に天乗り、

垂木は扇に配り、軒裏を塗り込める。内部は天井を張らずに、架構  
をみせる。建立年代は大正もしくは昭和のはじめ頃と考えられる。

表門  
一間薬医門

建築年代は虹梁の絵様から十八世紀末頃と考えられる。

淨念寺 近江町世継一〇一四 (浄土真宗大谷派)

本堂 桁行七間、向拝三間、入母屋造、棟瓦葺

淨念寺は、旅の僧が里人に与えた仏像のために建てられた堂に始  
まると伝えられる。長享一年に真宗に帰し、慶長年間に大谷派に転  
じた。

本堂は、正面に落縁、三方に広縁をもつ大規模な真宗本堂である。  
寺伝によると、天保年間に焼失したと伝え、現本堂はその後に建て

## 第五節 近江町内の近世建築

深光寺 近江町世継一〇三四 (浄土真宗仏光寺派)

本堂 桁行五間、梁間五間、向拝一間、入母屋造棟瓦葺

深光寺は僧仁秀の開基と伝え、寛永年間に春慶が堂宇を再建した。

本堂は小規模な真宗本堂である。側柱筋は角柱とし、内部の柱は  
丸柱とする。外陣の二本の中柱は、福田寺の外陣の柱と同じく、柱  
が天井を突き抜けて小屋内の梁を直接受け立てる立ち登らせ柱として  
いる。建築年代は、向拝の絵様から十八世紀末から十九世紀初め頃と  
考えられる。



図六十三 深光寺本堂外観



図六十四 淨念寺本堂外観

られたものと思われ、虹梁の絵様は幕末期の様相を示している。  
庫裏

草葺の古雅な趣の建物である。建築後四百年経つと伝えるが、後世の改造が甚だしく、建築年代および旧状は不明である。

表門  
一間薬医門、棧瓦葺

薬医門としては大規模である。男梁先端の木鼻で虹梁を受け、さらに三斗を組み、桁を受ける脰やかな意匠である。建築年代は虹梁の絵様から、十八世紀の末頃と思われる。

長野家住宅 近江町宇賀野

長野家はもと公家の家柄という。敷地は周囲を濠で囲まれ、敷地内に水路を引き込んでいる。この水は現在も野菜洗いなどに使用されている。周濠に面して草葺の門長屋が建ち、中世城館風の趣をつたえている。

主屋は草葺平入りで、現在は屋根は鉄板で覆われている。下手の座敷部分は落ち棟草葺としている。平面は図六十七の通りであるが、二度の改造を経ており、当初は広間型の平面形式であった。即ち、土間に面する一部屋は土座の広間とし、上手の二部屋がそれぞれ座敷と寝間であった。土座はもみがらを敷き詰め、席を敷いていたといふ。明治に上手に座敷と从間が増築され、その際にくちざしきも改造し、各部屋とも棹縁天井に改造している。その後、土座が床張



図六十六 長野家住宅外観



図六十五 浄念寺表門外観



りとなり、土間の背面側にも低い床をはり現在の形となつた。

当初の柱は檼を使用し、台鉢仕上げとしている。土間中央の柱は転用材をしており、蛤刃仕上げの曲がりくねった柱が印象的である。当初部分の建築年代は十八世紀末頃と推定される。

来照寺　近江町高溝六八　（浄土真宗本願寺派）

鐘樓　桁行一間、梁間一間、切妻造、棟瓦葺

古くは伊徳庵と称していたが、天文五年に玉泉坊と改称、宝永二年に木仏を安置して寺号を称するようになつた。庭園は寛政年間に作られたと伝えられる枯山水の庭で、昭和六十一年に滋賀県の名勝に指定されている。

鐘樓は柱の細い簡素な建物で、垂木から上は後世に修理されて新しくなつてゐる。寺所蔵の文書によつて、本鐘樓は寛政年間の建立といひ、虹梁の絵様からもその頃の建立と認められる。

證光寺　近江町顔戸一二四四　（浄土真宗本願寺派）

表門　一間薬医門、切妻造、棟瓦葺

立ちの低い小規模な門である。門の両側にくぐり戸をもつ。建築年代を示す資料はないが、柱材の風食が少なく十九世紀中頃の建築であろう。彦根城の門を移築したと伝えるが、眞偽は不明である。



図七十一　永福寺本堂外観



図六十八　来照寺鐘樓外観



図七十一　宝福寺本堂外観



図六十九　證光寺表門外観

**永福寺**　近江町箕浦一〇五　(浄土真宗大谷派)

本堂　桁行五間、向拝一間、入母屋造、棟瓦葺  
長和二年、三条天皇より恵福寺の号を賜い、慶長年間に天台宗から真宗に転じた。

本堂は、前面のみに広縁をもつ中規模真宗本堂である。柱は内陣内の柱を丸柱とする他は、すべて角柱としており、角柱を多用する点は古式である。屋根は近年修理されたが、もとはくづや葺であったという。建築年代は、虹梁の絵様から十八世紀末頃と思われる。

表門　一間薬医門、棟瓦葺

虹梁の絵様から、十九世紀中ごろの建築と思われる。

創建年代は不明である。永徳年間通幻禪師の代に禅宗となつた。

享禄年間には兵火によつて焼失し、その後、新庄氏によつて再建された。

本堂は前面に土間・広縁をもち、六室構成とする方丈形式の大規

模な建物である。組物は舟肘木とする簡素な構造とする。近年屋根替えがおこなわれ、外觀が大きく変わつてゐるが、内部には当初材と思われる部材が残り、当初の虹梁の絵様から建築年代は十七世紀中頃まで遡るものと考えられる。当初の虹梁は室中(前面中央の部屋)と広縁境の三本と、室中と仏間(室中背後の部屋)境に架かる



**宝福寺**　近江町箕浦一四六　(浄土真宗本願寺派)

本堂　桁行七間、向拝一間、入母屋造、棟瓦葺

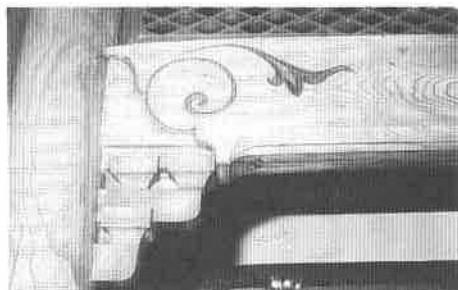
古くは天台宗で誓願寺と称したが、覚如上人の時真宗に転じた。  
元和年間に一度すたれたが、元禄十年に箕浦村惣道場止源寺となり、  
正徳二年に宝福寺と改号した。

立ちの高い、大規模真宗本堂である。虹梁の絵様から十九世紀中ごろの建築と考えられる。

**総寧寺**　近江町寺倉一〇八　(曹洞宗)

本堂　桁行八間、梁間七間、重層、入母屋造、棟瓦葺

図七十二 総寧寺本堂平面図



図七十五 総寧寺本堂詳細



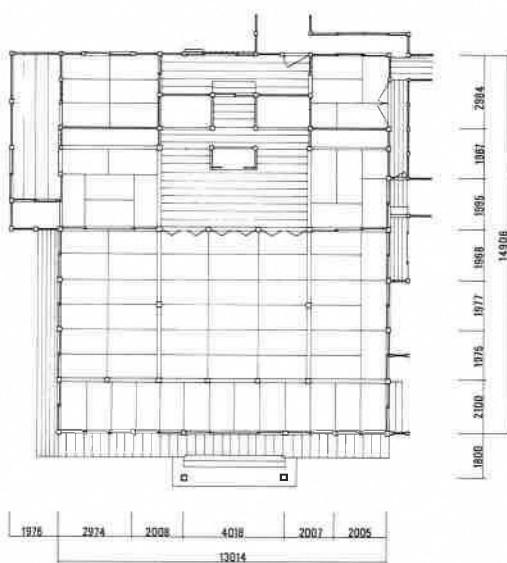
図七十三 総寧寺本堂外観



図七十六 総寧寺総門外観



図七十四 総寧寺本堂内部



図七十七 净宗寺本堂平面図

三本で、仏壇・向拝・広縁・土間に梁行に架かる虹梁は時代が下る。中古の改造によって、仏間脇仏壇を当初より半間後ろに下げて後門形式に改造しているほかは、平面の基本的な構成に変化はない。柱は一部が新しく入れ替えられ、天井は全面的に新しくされている。柱この建物は改造が大きいものの、当初部分は町内最古の建物と考えられる。

総門 桁行一間（上層三間） 横門、入母屋造、桟瓦葺

建築年代は虹梁の絵様から十九世紀の前半と思われる。

淨宗寺 近江町西圓寺七〇七（浄土真宗本願寺派）

本堂 桁行五間、梁間六間、向拝一間 入母屋造草葺

古くは天台宗として西圓寺東の坊と称していたが、明応年間に真宗に転じ淨宗寺と称した。

本堂は前面に広縁をもつ小規模な真宗本堂である。柱は来迎柱以外はすべて角柱とし、組物を使わない簡素な構造である。寺には棟札が残っており、安永二年（一七七三）建立とあるが、外陣および向拝に架かる虹梁の絵様から、建築年代は十七世紀中ごろまでさかのぼると考えられる。現本堂は磯（米原町か）から移建したと伝え、棟札は移建時のものと考えられる。現仏壇はこの時に造られたものであろう。建築年代が古く、浄土真宗末寺の簡素な本堂の一例として注目される。



図七十八 淨宗寺本堂外観



図七十九 淨宗寺本堂内部

近江町文化財調査報告 三

福田寺建造物調査報告書

平成二年三月

編集 奈良国立文化財研究所

発行 近江町教育委員会

長沢御坊 福田寺

印刷 明新印刷株式会社